

研究会には既に橘が来ていて、祐子を出迎えてくれた。祐子は明るい声で挨拶した。中に入ると、馬場がセンターテーブルの上に新聞を広げて読んでいた。祐子が

「おはようございます」

と挨拶すると、馬場は新聞から目を離さずに低い声で

「おはよう」

と言った。

「朝から大分暑いですね。今日も暑くなりそうだ」

そう言うと橘は厨房に行き、麦茶を入れたグラスを2個持って来た。既に馬場の前のテーブルの上には、飲み掛けの麦茶のグラスが置いてある。

「さて、今日は語録をレビューしてみるか」

橘は書棚から「原智明語録」とタイトルされたファイルを取り出した。馬場が新聞を畳んで横に置いたので、橘はソファに座ると直ぐファイルを開いた。祐子は橘の隣に座った。反対側に馬場がいる。祐子はこの場面を想定して、今日は裾の長いワンピースを着て来た。ファイルを一瞥すると祐子は心が弾んでくるのを感じた。ファイルには最初のページに語録作成の趣旨を述べた前書きがあり、2ページと3ページが目次になっている。登録されている言葉がそこに一覧されていた。42項目が記載されていて、その後に更に追記できるようになっている。1から30迄は既に祐子の知っている内容だった。

「わたし、目黒の支部で語録を拝見させていただいたんですが、全部で30項目でした。31番目からは後で追加されたのですか？」

馬場が答えた。

「ああ、それね。支部にはいろいろな人達の感動した言葉をまとめた30項目だけしか渡してない。31番目から42番目までは専門的な内容で、一般の人には理解し難い内容だ。われわれには全く分からない内容もある。文章表現できないものもあるから、そういうのはタイトルだけを書いてある」

「拝見させていただいてもよろしいですか？」

馬場が答えた。「1～30迄は特に制約がないが、31～42は研究会に

入会しないと閲覧もできない。崎野さんだったね。君も入会するかね」

「はい、何か規約みたいなものはありますか？」

「一応あるけど、まあ、一般事項を記載してあるだけだな。一つだけ制約事項がある。研究会の承諾無しに語録の内容を転用、転載してはならないというやつだ。あとは特別会員が月1万円、普通会员が月3千円、賛助会員は月千円となっている」

そう言いながら馬場は立ち上がり、机の引き出しからA4の綴じ込みを持って来て祐子に見せた。祐子は黙って規約を読んだ。タイトルは「著作文書所有権帰属公生証書」となっていて、公正証書の公証人の印が押してある。「すべての語録は原智明に帰属する」と記載されていて、研究会が代理人になっていた。

「きちんと管理されているんですね」

書類に目を通すと、研究会の代表が馬場になっているのが分かった。

「おいは原智明が失踪する前から、彼の資料の重要性を認識していて、おいが「研究会を作る」と言ったら、彼は笑っていた。彼が「この資料は間違っていると危険なことがある」と言っていたじゃって、すぐに公証人役場に行って公正証書を作成してもらったと。勿論草案はおいが原智明と相談して作ったんじゃど」

橘が説明を補足した。

「研究会は変わり者の集まりのように見えるけど、馬場さんが目を光らせているから、安心して集えるんだ。でないと、とんでもない組織に介入される可能性もあるんだよ。崎野さんが純粋な動機でここに来たことが分かっているからこんなことを話せるんだけど、他言は絶対無用だよ」

「はい、分かりました。わたしは専門的な知識を持ち合わせませんので、一般会員にさせていただけないでしょうか？」

「それがいい」

馬場はそう言うと、机の引き出しから一般会員用の入会申込書を出して来た。祐子はその紙の住所欄に藤代宅の住所を書き、その後之内と書いて署名し、ハンドバッグから財布を取り出して3千円を馬場に渡した。馬場は領収書に判を押して祐子に手渡した。

「さあ、今から祐子さんは会員だ。1番から30番まではもう知っているんですね。31番から見てみましょうか」

橘はそう言いながら語録のページを繰った。31番目のタイトルは「想念の具現」となっていて、説明文には「想念は形を持つことで具現できる。しかし、形だけでは表出しない。そこには意識が作用しなくてはならない。意識を作用させることで想念はエネルギーとして力を持つ。想念と現出するエネルギーの関係式は次の通り。XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」と見るからに難解そうな数式が書かれている。馬場が

「この文章は、次の時代への橋渡しの文章だ」

と言った。祐子はページを繰った。次は32番目だ。タイトルは「DNAの意味」となっている。説明文はかなり長かった。「よくDNAという形態を思いついたものだ。DNAは生物の全体を定義している。設計で言えば要件定義書だ。それぞれの項目が人間の機能に対応している。その機能を「あり」「なし」で定義している。人間はよく分からないから、ほとんどの機能項目に「なし」のマークを付けている。潜在意識がやっている。分からないことは「なし」にするしかない。「あり」となっているのは全体の3パーセントほどだ。肉体の機能は人間の全体の3パーセントに過ぎない。残りの97パーセントはほとんど現在の人間が忘れてしまった内容だ。10個ばかり例をあげてみると、①ミクロのものや宇宙の果てのものを見る力 ②数キロメートル先の蟻の足音など微細な音を聞き取る力 ③人や動物の感情の動きを読み取る力。④人の考えている内容を読み取る力 ⑤個体の内部を見通す力 ⑥物質の中に入り込む力 ⑦特定領域の重力を調整する力 ⑧肉体の特定の機能を停止したり、始動したりする力 ⑨4大を調節する力 ⑩時空間を切り替える力 これらの能力は一つのスイッチを切り替えるだけで得られる訳ではない。いくつかのスイッチの組み合わせで切り替える。しかし、最近その切り替えを行える人が増えてきている。DNAは光をコントロールできる。光がこの世界を作り上げている。つまり、DNAを制御することで世界の構造を変えることができる。究極的には人は宇宙を創造できる力を内側に包含している」

橘が言った。

「この文章を読んで、僕は、人間の可能性が無限なのだと覚った。クローン技術などと云うが、それは現象世界の中の模型づくりに過ぎないことも分かった。これからどうやってこの問題に取り組んだらいいか、途方に暮れているところなんだ。もっとも原智明さんの言葉が真実だと仮定しての話だけれどね」

祐子は、「賢達はきっと⑩の時空間を切り替える力を持っているんだ」と思った。ただ、それが意識的に行われていないことが問題だと思った。祐子は更にページを繰った。33番目は「共振について」となっている。最初の一言が衝撃的だった。「共振で地球も破壊できる……」馬場が言った。

「ニコラ・テスラという人を知っているかな？彼の考えていたことを彷彿とさせる内容だ。彼が言っていた地震波についても触れている。この文章とそこに載っている数式は、意識のレベルの低い者に悪用されると危険だ」馬場のその言葉に祐子は苦笑した。そして「会長さんだって、昨日はいやらしい考えを持ったのだから、意識レベルが高いかどうか疑問だね」と思った。それから順次ページを繰ったが、祐子はタイトルを見ただけで34から41までは、自分には簡単には理解できない内容だと思った。34「光速の意味……無限大と無限小」 35「性の決定と呪縛」 36「中心極限定理とモードのシフト」 37「経済社会のつくる虚構」 38「対消滅……陰陽の統合」 39「言葉と芸術」 40「空間と境界」 41「宇宙の創造」 最後に42「慈悲の作用」となっている。この最後のページを開けて説明文を読んだ。このページだけが祐子の入ってゆける領域だった。

「人間が持つ能力でこれほど凄いものはない。これはブラックホールとホワイトホールを自分の中に作ることと同じだ。自己というクラインの壺の入り口に慈悲のエネルギーを注ぎ込むと自分が慈悲に権化して、出口から現れる。意識で時空間を超える為には慈悲のエネルギーを使うのが最も近道だ。慈悲のエネルギーはミクロの微小から宇宙全体を包含する無限大にまで変化させることができる。虫の這う姿を可愛いと思う愛の心は力が弱いからすぐに執着に変化してしまう。愛を増幅する為には純粋な素地が絶

対条件だ。これを数式で現すことは非常に難しいが、次の式でシミュレートし、検証することが可能なはずだ。XXXXXXXXXXXXXXXXX
この式の第2項以下はマイナスのエネルギーを作る要素だ。第1項だけで共振を起こさせることが、無限の慈悲への拡大を実現する方法だ。虫の這い廻る姿を可愛いと思ったら、何度も同じ感覚を起こさせる、そしてその可愛さを虫全体に感じるまで拡大する。それから虫を育てている環境を賛嘆する。それを繰り返す。こういう風に胸が熱くなる感覚を反覆し、広げてゆく。これを継続すると愛はだんだん大きくなって行く。無条件、無思考で愛することだ。ある時それは指数関数的に拡大し始める。そしてそれが無限の慈悲のエネルギーを生み、自身が慈悲そのものになる。それが絶対存在に通じる最も容易な道だ」

それを読むと祐子の瞳から一筋の涙が流れ落ちた。祐子には何故涙が流れたのか分からなかった。馬場と橘は祐子の涙を見逃さなかった。

「所長さん、31から42まで写させていただいてもよろしいですか？」

「原則は禁止している。どこからどう漏れるか分からない。危険な部分が含まれているからな」

橘が馬場の方をちらりと伺ってから言った。祐子は頷いた。

「祐子さん、今日はこれから何か予定がありますか？」

「はい、午後2時15分に亜希子さんのお母さんが見えるので、空港にお迎えに行こうと思っています」

「そうですか。デジカメを持っていたら、あとで景色のいいところに案内しようと思ったのですが、それじゃ無理ですね。そう、この窓からも、ほら霧島が美しいでしょう」

「デジカメならあります」

祐子はそう言うとハンドバッグの中を掻き回して、デジカメを取り出した。

「解像度はどのくらいあるんですか？」

「確か1000万画素くらいだったと思いますが」

祐子は窓のそばに近づき外の景色を撮った。

「祐子さん、今度は所長と僕の記念写真を撮ってくれますか？」

橘は微笑みながらそう言うと馬場の方に廻ってソファーに腰掛けた。祐子

はカメラをふたりに向け「はい、チーズ」と言ってシャッターを切った。テーブルの上にはノートが開いたまま置いてある。馬場がノートのページを繰って31項目目を開き、右手の人差し指で綴じ代部分を押さえてページの膨らみを平らにした。祐子は馬場と橘の配慮に感謝の気持ちを抱きながら、ノートにピントを合わせてシャッターを押した。カシャと音がすると、馬場が次のページを繰った。祐子は再びシャッターを押した。そうして42項目目まですべて写真に収めてしまった。

「ありがとうございます。すみません、もう一度こちらを向いていただけますか？」

ふたりが祐子の方を向いて微笑んだ。馬場がノートを閉じた。カシャ……祐子がデジカメをハンドバッグにしまうと、一人の背広姿の男性がドアを開けて入って来た。

「こんにちは！ おや、この方はどなた？」

「やあ、菅生さん、久しぶりですね。この方は東京からいらした崎野さんと仰って、この前行方不明になった内観賢さんと藤代亜希子さんのお知り合いの方なんですよ」

「お美しい方だ。菅生と申します。お見知りおきを」

「崎野と申します」

菅生はテーブルの上のノートを見ると馬場に向かって媚びるように言った。

「所長、今日はそのノート見せていただけませんか？」

「いいや、正会員じゃないと見せるわけにはいかないんだな」

「所長、それはないですよ。所長が入会させてくれないんじゃないんですか」

「それは君がこの情報の転用・転載をしないという条件を受け入れないからだ」

「だけど人類にとって貴重な情報を多くの人々に知らせたり、彼の理論に基づいた商品を販売したりすることでどれほど社会の役に立つか知れませんよ」

「じゃ、駄目だな。やはり賛助会員でいてもらうしかないな」

祐子も菅生の言うことに一理あると思ったが、馬場は受け入れなかった。

祐子はどうして自分には会員になるのを許してくれたのか、いや、むしろ推奨さえしてくれたのか、その上、資料の開示まで許してしてくれたのか不思議に思った。菅生が橘の方を向いて言った。

「橘さん、何とか所長を説得してくださいよ」

「菅生さん、原智明さんのどの部分に惹かれたのですか？」

橘が訊いた。

「橘さん、そりゃ、わたしは原智明さんが失踪したでしょ。それに噂によると彼は凄い計算能力を持っているって云うし、知り合いが、原智明さんの理論を技術に生かしたら大会社が出来ると言っていたんで」

祐子はこの人の動機が不純なのかも知れないと思った。その時、一人の40歳前後に見える女性がドアを開けて入って来た。

「こんにちは」

菅生が女性に向かって話し掛けた。

「やあ、浅田さん、元気かね」

「元気よ。菅生さんは？ 入会できたの？」

「まだ駄目だ。所長さんが認めてくれない」

「所長さん、わたしはまだ駄目ですか？」

「浅田さんも賛助会員だからいいじゃないか」

「わたしは菅生さんみたいな欲が無いのを知っているじゃないですか。ねえ、会員にしてくださいよ」

「あなたは娘さんから話を聞いて面白そうだったんでしょう。なら、どうして娘さんは研究会を嫌っているんでしょうね」

「あの子は原智明さんに助けられたくせに、彼の能力を恐れているんですよ。「原智明さんは宇宙人に違いない」なんて言っていて、だからわたしが娘に代わって何かしなければ申し訳なく思っているんですよ」

「はい、だから賛助会員になっていただいているじゃありませんか」

「いいえ、所長さん、正会員でなくちゃ貢献できませんよ。それに詳しいことも分かりませんしね。大体、どんな会員の方がいるのかも知らないんですから」

浅田はそう言いながら祐子の方を見た。祐子は軽く頭を下げた。この研究

会に入るのが簡単ではないことを初めて知った。

橘が空港まで祐子を送った。祐子は辞退したが、橘が「十分時間があるし、是非送りたい」と申し出たので、やむなく受け入れた。

空港の出口から藤代登紀子の姿が現れた時、祐子は幾分ほっとした。

「あら、いらしてくださったのね」

「お母様、ご無事で安心致しました」

祐子は藤代登紀子の荷物を引いて到着ロビーから橘の待っている駐車場に移動した。登紀子は微笑みながら祐子の後に従った。橘は車を降りて待っていた。ふたりが近づくと橘が黙って頭を下げた。

「橘さん、こちらは亜希子さんのお母様です。— こちらは鹿児島県人高校の橘先生です。亜希子さん達の失踪調査に協力してくださっています。

今日はここまで送ってくださいましたの」

「藤代でございます。いろいろとお世話になりまして、ありがとうございます」

「初めまして橘と申します。わたくしたちは、以前鹿児島で失踪した原智明さんについて研究をしている研究会の会員です。亜希子さんの失踪と共通点があるので祐子さんの調査に歩調を合わせています」

そう言って橘は車のトランクを開け、登紀子のトラベルバッグを積み込んだ。それから、素早く後部座席のドアを開けると

「さあ、お乗りください。ホテルまでお送り致します」

と言った。登紀子は

「ありがとうございます」

と言って車に乗り込んだ。橘はドアを閉め、祐子の為に助手席に廻ってドアを開けた。祐子が乗り込むと、静かにドアを閉めた。橘の一連の動作はまるで抱え運転手といった体だった。登紀子は青山の自家用車と錯覚を起こしたが、車に乗ると狭苦しさを感じて意識が現実に戻った。

「橘さん、ご親切にして頂いて、なんとお礼を申し上げてよろしいのかしら」

「とんでもありません」

「お母様、橘さんには昨日初めてお会いしたのですが、いろいろ親切にし

ていただき、一人でどうやって調査しようかと困っていたときでしたのでとても心強く思いましたの。今日も午前中、橘さんと所長さんと一緒に原智明さんのことを調べていたのですよ」

橘はふたりを江陽館まで送った。チェックインしたのは5時を回った頃だった。祐子が会釈して言った。

「橘さん、大変お世話になりました」

「いえ、少しでもお役に立てて光栄です。また、何かありましたら、連絡いただければ、できる限りお手伝い致します」

「お心遣いいただき、なんとお礼申し上げます。本当にありがとうございました」

藤代登紀子も深々と頭を下げた。ふたりは案内係に従って部屋に向かった。最上階にある20畳ほどの部屋だった。案内係が荷物を置いて去ると、間伐を入れず女将が挨拶に来て部屋の説明や近辺の見所などを説明した。調度品は特別上等という訳ではなかったが窓は広々としていて、祐子が昨日泊まった部屋に比べ、桜島を望む景観にはその周辺を巡る海の広がりとお深さを感じさせる。窓際に置かれている肘着き椅子とテーブルは昨日の部屋にあったものより上等で新しかった。

「祐子さん、なかなかいいお部屋じゃないですか」

「おかあさまがお気に召すかどうか心配していました」

「桜島が素敵ですこと。初めての貴女と一緒にのお泊まり、楽しみよ」

「おかあさま、わたくしもとても嬉しく思います。わたくしがまだ赤子の頃に母は亡くなりましたから、家族でお泊まりするなんて初めてのことなのです・・・家族なんて厚かましくてごめんなさい」

「何を言っているのよ。貴女はわたしの娘になってもらったのよ。母はわたくしよ。貴女は歴としたわたくしたちの家族なのよ」

祐子はこれまで家族という言葉がこれほど暖かく感じたことはなかった。叔父の家では祐子に対してどこかよそよそしいところがあり、日常必要なお金に困ることは無かったが、一緒に旅行したことは一度もなかった。友達が家族で遊びに出掛けた話を聞くのが、堪らなく辛かったことを思い出した。

「おかあさま、今お茶を用意致します」

祐子は浮かんで来る涙を止めようと努めた。登紀子は祐子の入れた茶を嬉しそうに飲んだ。

「祐子さん、主人、いいえ貴女のお父様と相談したのですが、あなたは亜希子の姉になってくださいな。2歳違いですからきっと気の合った姉妹になれますよ」

「はい、お母様」

祐子は自分が登紀子をお母様と自然に呼べることを不思議に感じた。祐子は昨日沙織の兄に追い掛けられたことを話した。沙織が学生の頃の親友であることも話した。登紀子は「それは大変だったわね」と言ったが、祐子がそんなことまで話してくれるのを嬉しく思った。ふたりは浴衣に着替えて浴場に出掛けた。登紀子は財閥企業の社長の妻であることを少しも外に出さない控え目な女性である。裸になった姿も、皮膚に皺は見えるものの足腰に衰えた様子はなく、肌には潤いすら感じられた。腹部が出ていることもなく、裸で祐子と並んで歩いても祐子の若さとの対比で登紀子が老いた感じに映ることはなかった。掛け湯を使ってからふたりは一緒に湯船に浸かった。

「祐子さん、あなたスタイルがいいわね。亜希子もいい方だと思ったけど、貴女の方が身体が引き締まっているようね」

「あら、おかあさま、恥ずかしいですわ」

といいながらも祐子は嬉しかった。

「いいお湯ね。ここからも桜島が見えるのね。いい展望ね」

「はい、とても素敵なホテルだと思います」

湯船から上がってふたりは身体を洗った。

「お母様、お背中を流させてください」

「ありがとう」

祐子は浴室に用意されているボディシャンプーをたっぷり染みこませたタオルで登紀子の背を流した。肝斑（しみ）も無くとても滑らかな肌だった。登紀子の背中が真っ白な泡で隠れた。その泡の間から時々ピンク色の肌が現れる。祐子は暫く泡の中で登紀子の背を洗った。タオルを濯ぐと登紀子

の背を手のひらで撫でながら湯を掛けた。懐かしい気分が沸いてきた。触れた記憶もない自分の母親がどんな肌だったのだろうかと思つた。自分が生まれた時、母親は30歳近かったと聞いた。もしそうなら登紀子と同じ歳になっているはずだ。叔父・叔母は祐子の生まれた経緯はおろか、両親の写真さえ見せてくれなかった。両親の家にはアルバムなど無かったと言われた。小学生の頃、祐子は随分叔父や叔母に食い下がったが、どうしても教えてもらえなかった。いつの頃からか祐子は自分が天涯孤独なのだと思うようになった。両親がどこに住んでいて、どんなタイプの間人だったのかも一切教えてもらえなかった。中学生の頃、両親の生い立ちを調べようとして市役所に行ったり警察に行ったりしたが、どうしても両親の生きてきた足跡は得られなかった。戸籍上は叔父・叔母の養女ということになっていた。祐子は早く自立して叔父の戸籍から出たかった。テレビで見る女優に母親のイメージを求めたが、それもいつも空しく終わった。どうしても祐子には母親を思い描いて観ることができなかった。涙が込み上げてきて、登紀子の背から離れると祐子は急いで顔を洗った。登紀子はそれを感じたようだった。

「祐子さん、今度はわたしが貴女の背中を流してあげるわね」

祐子は黙って頷いた。声が出なかった。登紀子は祐子の背後に廻り優しく背を流した。

「もう大丈夫よ。わたくしがいるから」

祐子は背中に母の優しい手を思い描いた。頬を伝って流れる涙は湯に混ざり、顔がくしゃくしゃになった。涙は止まらなかった。祐子はもう一度顔を洗った。風呂から上がると、既に部屋では二人の仲居の女性が食事の用意を始めていた。27、8歳の年上の方の仲居が料理の説明をし飲み物の注文を聞いた。

「祐子さん、シャンパンをいただかない？」

「はい。お母様、お酒は大丈夫ですか？」

「わたくし、お酒は好きなのよ。でも、沢山はいただかないの」

ふたりはシャンパンで乾杯した。

「亜希子と内観さんが無事見つかること。そして祐子さんがわたくしたち

の家族になったことを祝して」

登紀子の発声が祐子には嬉しかった。絶対賢と亜希子を見つけようと思った。懐石料理だった。綺麗に盛られた前菜の後に出了刺身はトロとウニ、アワビが美しく盛り付けられていた。

「あなたは、お酒沢山いただけるのかしら？」

「いいえ、わたくしもお母様と一緒に、お酒は好きですけど沢山はいただけません」

祐子は酒には自信があったが、登紀子に合わせた。

「今日は好きなだけいただいてよろしいのよ」

シャンパンも一級品だと思った。口当たりが良く、程好い甘みを感じられた。

「祐子さん、お料理おいしいわね。やはり鹿児島は黒潮に乗ったお魚が捕れるのね。新鮮だわ」

そう言いながら登紀子はアワビを摘み、コリッと噛んだ。祐子も真似をした。

「おかあさま、わたくしこんなにおいしいお刺身をいただいたのは初めてです」

「祐子さん、どうしてわたくしたちが貴女を養女にしたいと思ったかご存じかしら？」

「亜希子さんが失踪してしまったからですか？」

「勿論そのこともあるわ。でもね、本当はわたくしたち貴女のご両親のことをとてもよく存じ上げていたのよ。時々、お食事をご一緒させていたいたりしていましたのよ」

祐子は驚いた。胸の鼓動が激しくなり、顔が紅潮してくるのを感じた。祐子は箸を置いて登紀子を見つめた。

「本当はね、貴女には何も話さない方がいいと主人が、いいえお父様が言ったのよ。でもわたくしが、「祐子さんには本当の娘になっていただくのだから」と申しあげたの。お父様もやっと納得してくださったのよ」

登紀子はシャンパンを手にして、少し口に含んでから言った。

「貴女の叔父さまが社長をしている会社は、元々貴女のお父さまがお祖父

さまから相続した会社なのよ。兄弟二人だったでしょ。ですから、貴女のご両親が亡くなったとき、あなたのお父さまの弟、つまり貴女の叔父さまが会社を引き継いだのね。遺産相続に随分複雑な手続きを取ったようね。わたくしも詳しくは分からないけれど、結局貴女の世話をするというので、全財産が叔父さまの所有になったようね。叔父さまの家も、あなたのお父さまがお建てになったばかりの新築の家だったのよ。貴女が生まれて、お母様が産院から退院なさったとき、何かの手続きがあるということで、一時貴女を病院に残してお父さまの車でおふたりはどこかに行こうとしていらっしたの。その時事故に遭われたのよ。車のブレーキが利かなくて、崖から転落して了われたのよ。警察は初め他殺の疑いを持っていたようだったわ。でも、最終的には事故死ということになったのよ。あなたのお父さまはご立派な方だったわ。わたくしたちはお友達のお付き合いをさせていただいていたのよ。とても礼儀正しい方だったわ。貴女のお母さまはとても優しい、貴女によく似た方だったのよ。でもお母様は貴女より小柄だったわ。貴女はお父さまの体型を引き継いでいらっしやるのよ。貴女に初めて逢った時、貴女の名前を聞いて「もしかしたら」と思ったの。そうだと分かったのは、貴女がお母様によく似ていて、それなのにご自分のことを何もご存じなかったからよ。貴女の叔父さまはお父さまとはあまり仲がよろしくなかったのよ。叔父さまはいろいろな事業に手を出されて随分失敗されていたのよ。ですからあなたのご両親が亡くなられた時は、警察が先ず貴女の叔父さまを疑ったようなの。でも最後には事故死ということになったのよ」

祐子は黙って聞いていたが、次第に身体が震えてくるのを覚えた。それは怒りとも、悲しみとも言えない奇妙な感覚だった。祐子は震える手でシャンパンのグラスを取り上げると一気に飲み干した。

「おかあさま、ありがとうございます。長い間、もやもやしていた霧が晴れた思いが致します。でも、もうわたくしはお母様とお父様の娘にさせていただきます。過去のことは今のわたくしの心の中にはありません。叔父や叔母のことも、自分をここまで育ててくれたという事実だけを胸にしまっておきます。・・・おかあさま、わたくしを籍に入れてください

ますか？」

「勿論ですよ。貴女が叔父さまの戸籍から抜けることができたらずぐに手続きをしましょう」

「ありがとうございます」

「ごめんなさいね、こんなお話をして。随分苦しかったでしょう。気分を直してお食事を続けましょう」

そう言いながら、登紀子は祐子のグラスにシャンパンを注いだ。

「わたくしはね。あなたがこんなに明るく、太陽のような性格に育ったことが不思議なのよ。わたくしにはこんな素敵な娘が出来て嬉しいわ」

祐子の目に涙が光った。祐子は身体の震えも収まって顔に輝きが戻ってきた。食事の最後に寿司が出た。それが主食のようだった。ふたりは既に満腹でトロの握りを一つずつ口にするのがやっとだった。

「お母様、もうお腹が一杯です」

「祐子さん、わたくしもよ」

ふたりは声を立てて笑った。祐子の心の中には不思議と過去へのわだかまりは残っていなかった。ふたりはデザートのアイスクリュームを食べて食事を終えた。10分ほどして、仲居の女性が2人やって来て、手際よく食膳を片付け床を用意して行った。ふたりは窓際に寄せられている座卓に向き合って座った。祐子がお茶を入れた。

「ありがとう。祐子さん、そろそろ亜希子達のことを相談しましょう」

「はい」

祐子はハンドバッグを持って来て、中から2冊のノートを取り出した。

「お母様、わたくしこちらに来てから、今度の失踪についておぼろげながらですけどイメージができつつあります」

「そう。是非聞かせていただきたいわ」

「はい、おかあさま。まず、現在の地球の環境がわたくしたちの意識に変動を与えているらしいということ、受け入れていただきたいのです。今までのものの見方だけだと今度の事件は解決できないと思うのです」

「祐子さん、分かっているわよ。お電話いただいたでしょ。その時に分かったわ。本当はもっと前から、おかしいとは思っていたのよ。この間も言

ったように亜希子の周りでおかしなことが起きていたでしょう。わたくし「きっと何かこの世界の環境に異常が起きているのではないか」と思っていたのよ」

「わたくしは亜希子さんや内観さんに特別な能力があると思うのです。意識の働きで、現れたり、消えたりできるような。何か普通の人に無い力を持っているような気がするのです。そして、ここからが肝心なところですけど、意識が強い力を持つとその作用が起き易くなるのだと思うのです。ですから、亜希子さん達をこの世界に戻すためには、強い意識の力を使えばいいと思うのです。そしてもう一つ大事なことは、その力は集中していないと作用しにくいと思われることです。もし、作用を与えようとする人と作用を受ける人の意識が同じで、しかも集中していれば、現象が現れると思うのです。強い作用の力は、丁度、本を表にしたり裏返したりするときに使う力のようなものだと思うのです。一旦裏返せば、後はなんの力も加えなくてもずっと裏返った状態にいるのだと思います」

「祐子さん、頭がいいのね。どうしてそんなことを思い付いたの？」

「いいえ、わたくしではありません。内観さんと原智明さん、それに不思議な老人の話の総合してみるとそう判断できるのです」

「もしそうだとすると、わたくしたちは具体的にはどうすれば亜希子達をこの世界に戻せるのかしら」

「はい、今亜希子さんが抱いていると思われる意識の方向を先ず見付けて、自分の意識から余分な思考を排除して、それからそれと同じ意識の状態を作って、その状態の中でこの場に戻って来るように意思を働かせることだと思います」

「なかなか難しそうね」

「それに、危険が伴うと思います。万に一つもそんなことはないと思いますが、もし亜希子さんの意識が「戻りたくない」という状態だったら、こちらで意識を向けている人が、亜希子さんのいる空間に引き込まれてしまう危険性もあるからです」

「今日できるかしら」

「お母様、今日は止めた方がよろしいと思いますの。お酒を飲んでますで

しよ。意識が集中できないと思いますから」

「そういうものなのね」

「今日は、まず準備を整えたらよろしいのではないかしら。お母様がわたくしの長い間の霧を晴らしてくださいましたので、わたくしは大分意識を純粹にできるような気がします。明日は何かが実現できると思います」

祐子は賢が少し現れそうになったことは口にしなかった。また消えてしまったということで登紀子に不安を抱かせたくなかった。祐子も登紀子もまだ酔いが残っている。祐子はここで瞑想状態を作るのは好ましくないと思った。

「祐子さん、わたくし、アルバムからいろいろな写真を持って来たのよ。ご覧になる？」

「はい。是非拝見させていただきたいわ」

登紀子はトラベルバッグの中から亜希子の写っている写真を10枚ほど取り出した。そして、それをさっと繰ってから1枚の写真を選んで祐子の前にそっと差し出した。

「貴女のご両親よ」

祐子はドキッとした。緊張を抑えながら、その写真を食い入るように見つめた。胸に熱い思いがこみ上げてきて身体がわなわなと震えた。母は美しく、可愛らしかった。父は優しそうで、逞しかった。負の感情が沸き上がるのを感じた。祐子は思考を止めて深呼吸した。目を閉じて心で話した。

「わたしを産んでくださって本当にありがとう。わたしはおとうさん、お母さんの死を受け入れることができました。これからは藤代肇、藤代登紀子のふたりをお父さん、お母さんとして生きていきます。もう、迷い、苦しむことはありません。おふたりの永遠の至福をお祈り致します……」

「この写真、貴女にあげるわ」

「いいえ、おかあさま、この写真はアルバムに戻してください。わたくしには今のお母様とお父様しかありません」

「そうね、この写真は貴女を苦しめるだけかも知れないわね。アルバムに戻すわね」

そう言うと登紀子はその写真をトラベルバッグにしまった。

「祐子さん、これは亜希子が特に喜んでいた時の写真よ。役に立つかしら」
登紀子は写真を座卓の上に広げて見せた。幼児期におもちゃで遊んでいる一人の写真、家の庭で両親と一緒に撮った写真、旅行に行ったとき滝を背景にして母親と一緒に撮った写真、高校受験に合格した時の写真、最近信州に旅行したときに母親と共に撮った写真、大学の卒業証書を手にして笑っている写真、何れも歓びに満ちたものばかりだ。

「明日、この写真で試してみましよう」

と祐子が言った。

「それと、もう一枚写真があるのよ。でもこれは貴女には、いやな写真でしようけど」

そういうとトラベルバッグの中から葉書ほどの大きさの写真立てを取り出した。その中には亜希子と賢が並んで写っている写真が入っていた。

「この間、大山に調査ということで出掛けた時の写真のようね。亜希子の机の引き出しの中に入っていたの」

祐子は頭が熱くなった。賢が自分以外の女性と写真を撮ったことに嫉妬心がわき起こるのを意識した。しかし、不思議と亜希子に対する敵対心は起きなかった。亜希子が自分の妹になったからなのかと思った。祐子はできるだけ冷静さを装って言った。

「お母様、わたくし見るのは辛いですが、おそらくその写真が一番役に立つような気がします」

登紀子は亜希子を思い出した様子で、少し寂しそうに見えた。

「お母様、今日はお疲れになったでしょう。少し肩をお揉みいたしますわ」
そう言うと祐子は登紀子の背後に廻って肩を揉んだ。およそ15分ほど経って登紀子が言った。

「あなたも疲れているでしょうに。とっても気持ちがよかったわ。もうよろしいわよ。どうもありがとう。そろそろお休みしましょう」

まだ9時前だった。祐子も床に入ったが、様々なことが頭に浮かんでは消え浮かんでは消えて頭が冴え渡り、眠りに落ちることができなかった。さっきは打算的に写真の両親を忘れると言い切ったが、写真に写っていた両親の姿は、ずっと心の奥底で思い描いていた両親の姿に似ていたのかも

知れないと思った。だからすんなり受け入れることができたのだと思った。浮かんでいる両親の姿に、次から次に現れては消えてゆくいろいろな種類の花々を重ねてゆくと、やがて意識は薄れてきた。

翌朝の目覚めは素晴らしかった。カーテンを引かずに床に着いていたので、窓から見える桜島と周りの山々に陽が当たり山肌が白み始めた頃、祐子は自然に目が覚めた。登紀子は既に起きて顔を洗っているようだった。いつものような朝の眠気は無く、山肌に当たった陽が散乱し海上を照らしているかのように波が煌めいている。視力が増したのではないかと思うほど感覚が鋭くなっている。

「あら祐子さん、起きてしまわれたの？わたくし騒がしかったかしら」

「おはようございます。いいえ、とつても気持ちよく目覚めました」

「おはよう。今日は調査会社に行って、先週受け取った調査結果について説明を聞いてみたいと思うのよ。一緒していただけるかしら」

「はい、分かりました。その会社は鹿児島市内にあるのでしょうか？」

「そうよ、市役所の近くの城山公園の前にあるわ。10日ほど調査を続けてもらったの。でも、何も発見できなかったと報告を受けたの。残念だったわ」

ふたりが調査会社を訪ねたのは午前10時を少し回った頃だった。フロントで観光タクシーを頼むとふたりはそのまま鹿児島湾をフェリーで渡った。登紀子は甲板に出て海を眺めていた。眺めるだけで他に何もすることはできなかったが、そうすることが一番良いと思った。祈るような気持ちで眺めていた。その姿がいかにも寂しそうで祐子は声を掛けたくになったが、思いとどまった。調査会社は7階建てのビルの3階に事務所を設けていた。担当者が申し訳なさそうに挨拶した。

「遠くからお越しいただき恐縮致します。全力で調査を致しましたが、何も発見できず、大変残念です」

「大変ご苦労さまでした。何も発見できなかったということが、一つの事実として重要な意味を持つということもあります。今日は調査した内容を詳しく説明していただきたく思います」

担当者の男は緊張した顔になった。ゆっくりした動作で応接セットのセン

ターテーブルに報告書を広げた。報告書は50ページ程もあり、A4版のバインダーに綴じてある。

「この報告書は先週お客様のお宅にお送りさせていただいたものでございます。報告書のページ順にご説明させていただいてもよろしいでしょうか？」

「お願いします」

担当者は亜希子と賢が鹿児島に到着する段階の説明から始めた。所持品についても詳しく調べてあった。この情報が警察署からの情報であることは推測されたが、その中に祐子も藤代登紀子も気付かなかった事実があることが分かった。それは賢も亜希子も水着を持っていたということだった。その上、賢の荷物の中には競泳用の水中眼鏡も入っていた。祐子が確認した時には気付かなかったが、海水用トランクスに包んであったのだ。担当者の説明はフェリーに乗るときの服装に及んだ。ふたりとも麦わら帽を被っていた。この担当者は「何故麦わら帽を被っていたのか、理解に苦しみます」と言っていた。それはフェリーに乗った時間帯には小雨が降っていて、しかも風もあった。普通フェリーに乗った後、車から降りて船室に入る場合、麦わら帽は車内に置いておくと思われるのに、ふたりは麦わら帽を被ったまま車から降りた。しかも、雨の甲板に出ている。その時も麦わら帽を被っていたと思われる。この麦わら帽に今回の失踪の原因に絡むヒントが潜んでいるのではないかとの説明だった。警察が遺留品として認められたふたりの麦わら帽と履き物からの推察は、祐子が辿り着いた推測に近い内容だった。登紀子は目をぱっちり見開いて説明を聞いていた。やがてふたりが消滅した場面の説明になると、担当者が語調を弱めたのが分かった。未解明ということの説明しにくいようだった。

「いくつかの可能性を考え、それらの線に沿って調査してみました。まず、申し上げにくいのですが、おふたりが風の煽りを受け海中に転落したという見方ですが、これは警察も今の処この考えに帰結させようとしているんですが、何の物的証拠も目撃証言も無いのです。ただ、あの時船内から外を見ていた中年のサラリーマンが、ふたりが船室から出て行ってデッキに立っていたこと、デッキからふたりが海を見下ろしていたこと、それから

5分くらいして再びデッキを見た時はふたりの姿が無かったということを確認してくれました。しかし、彼の記憶は断片的で、その前後のことはよく覚えていないんです。彼の話から、その5分前後の間に海中に転落したのではないかと。彼がふたりを目撃したフェリーのデッキをよく調べましたが落ちた痕跡は確認できませんでした。あの日は雨が降っていましたから、多分痕跡も残らなかったとは思いますが・・・2番目は心中の可能性ですが、ふたりの関係が詳しくは分かりませんので何とも言えません。唯一、ふたりが脱いだ履き物を揃えて置いてあったということがその可能性を示唆しています。でも、この可能性はお客様によって既に否定されていますね。それにふたりの遺書のようなものも発見されませんでした。当日同じフェリーに乗った乗客を可能な限り調べてみましたが、特にそんな雰囲気を感じた方はおりませんでした。先ほど申し上げた中年のサラリーマンの方もおふたりに心中するような雰囲気は感じられなかったと言っていました。3番目の可能性は誰かに拉致された可能性ですが、これも一寸考えられません。先ほどの5分位の間に拉致事件が起きた可能性はありません。最後の可能性は別の船に乗り移ったという可能性ですが、この時の船長や乗組員に聞いたのですが、あの時特に他の船舶が運航していたということは無かったと言っています。ただ、1艘の釣り舟がありましたが、フェリーからは大分離れていたと言っていました。それで、この可能性も無くなりました。最終的には海中に転落したと結論付ける以外にないと思います。我々は1週間掛けてあの付近の海中を探索しましたが、警察の発見したものの意外には何も発見できませんでした。鹿児島湾の海岸線の探索と聞き込みも行いましたが、特に変わった漂流物も発見できませんでした。全く不思議な事件だと思います。こんな結論で費用請求するのは心苦しいのですが、・・・こちらが請求書になります」

「分かりました。やはり、原因不明ということですね。とりあえずこの段階で調査を打ち切ってください」

登紀子は来る前に金額を書き込んでおいた小切手をハンドバッグから取り出して渡すと、担当者が用意してあった領収書を登紀子に渡した。ふたりは調査会社を出た。11時50分を少し過ぎている。

「祐子さん、お食事にしましょうか」

「はい、おかあさま」

祐子は賢を失った悲しみと、新しい母を得た喜びが絡み合った不安定な感情に包まれていた。呼吸を整えると悲しみは喜びに通じるような気がした。ふたりはタクシーの運転手の奨める町外れにある中華レストランに行き食事を摂った。食事が済むと、登紀子が鹿児島市内を一望できる場所に行きたいと言うので、タクシーの運転手はふたりを城山に連れて行った。城山は海拔100メートル程度の低い山だが、そこは公園になっていて亜熱帯植物が茂り、鹿児島市民の憩いの場所になっているようだ。夜景も綺麗なもので夕暮れには若いカップルがデートの場所に使うと、運転手が説明した。そこからは鹿児島市内が展望できた。ごつごつとした構造物の後ろに、まだ息づいているのがはっきり分かる桜島が裾を海に沈めている姿が雄々しかった。空はよく晴れていて遠方に霧島連峰が望めた。山頂には既に2組のカップルがいたが直ぐにどこかに行ってしまった。幾つかのベンチに木の陰が映り涼しさを感じさせる。ふたりはその木陰のベンチに腰掛け、暫くの間鹿児島湾を眺めていた。

「祐子さん、ここで少し亜希子達のことを思ってみましょうか？」

「はい、わたくしも今そう思っていました」

「写真を持って来たのよ。わたくしとふたりで写っている写真よ。わたくしはその時のことを思い浮かべて亜希子を呼んでみるわ」

「はい、わたくしは内観さんとふたりでいた時のことを思い浮かべて、内観さんと呼んでみます」

「それでは、暫くそうしていきましょう」

「はい」

ふたりは瞑目した。祐子の心に賢の姿が浮かんだ。全身がぼーっとしていて胸の中の闇と賢の境目がはっきりしない。祐子は思考を止めて賢の姿をじっと眺めた。不明瞭な姿が次第にはっきりしてきた。祐子は心の窓に映った賢の姿に縋り付こうと思った。その時、登紀子の声が出た。その声と同時に賢の姿は掻き消えた。

「祐子さん、亜希子の声が聞こえたわ。あなた聞こえなかったかしら？」

「*****」

祐子はまだ、瞑想から醒めていなかった。

「祐子さん、亜希子は「必ず戻るから、わたしを呼び続けて」と言っていたわ」

「……お母様、亜希子さんが見えたのですか？」

「いいえ、声が聞こえただけよ。でも、亜希子がそこにいると感じたわ」

「わたくしにもすぐ近くに賢さんの姿が見えました。きっとふたりを呼び戻せると思いますわ」

「祐子さん、頑張りましょうね」

「はい、おかあさま」

タクシーに戻ると運転手が

「お客さま、如何でしたか？」

と言った。登紀子にはっこりして応えた。

「とても良い眺めでしたわ。素敵なところなのね」

運転手が城山公園について説明をしていたが、ふたりの頭は今展開した情景で占められていた。西郷隆盛と島津斉彬という言葉が何度も出てきたのは分かったが他の言葉はほとんど頭に入らなかった。

「お母様、今夜頑張ってみませんか？」

「ええ、ええ、今夜はお部屋でやってみましょう。あなた指導してくださいね」

「お母様、わたくしも手探りですけど、いろいろ試してみましょう」

霧島

祐子が既に用意されていた布団を畳み込んで壁側に寄せ座卓をその横に立て掛けてから、ふたりは2枚の座布団を敷き窓の方を向いて並んで座った。賢達が出現し易くしようと考えてそうしたのであった。ふたりの前にできるだけ広い空間を作った。夕食が済んでから既に2時間が経過している。夕食を済ませ、ふたりは入浴した。登紀子は祐子のアドバイスで心の緊張を解き身体をリラックスさせた。食事も控え目に摂った。勿論、ふたりは酒も飲まなかった。祐子は「今日こそ賢達が戻って来る」と確信した。意識

について登紀子にくどいほど説明した。雑念を捨てること、意識を研ぎ澄ますこと、亜希子が戻って来ることを信じること。「信じるというより、むしろ確信すると言った方が良いと思います」と付け加えた。そして、胸に亜希子の姿が映ったら何も考えずに見つめ続けること。実際目前に居ると感じられるようになるまでそれを続けること、意識の集中を切らないこと、途中で眠らないこと、絶対言葉を発しないこと、などなど細かいことを食事中、入浴中と3度説明した。そして瞑想に入る前に、もう一度意識を切らないことを強く伝えた。ふたりは城山の展望台で行った瞑想の時と同じ情景を思い浮かべることから始め、瞑想に入って行った。今度の瞑想で祐子は確実に賢を描き出した。賢が現れることは確実に感じられたが、何か非常に重たい力が賢を引いているのを感じた。祐子は賢の手を取って一生懸命に引っ張った。賢を引き戻す重い力が祐子の腕に押し掛かってくる。祐子は息が切れてきた。しかし賢の手を引き続けた。賢を引き戻す力は賢の意志によるものでないことが感じられた。もう、自分も引き込まれてしまいそうだと感じた時、綱引きで勝った時のように急に力が抜け賢の身体が祐子に向かって突進して来た。祐子は賢の身体を、両腕を上げて抱きとめた。目を開けると自分の腕の中に賢がいた。そして登紀子を見ると、登紀子と亜希子がきつく抱き合っている。祐子は涙が込み上げてきた。祐子の額からは汗が流れている。浴衣も汗で濡れている。祐子と賢、登紀子と亜希子は暫く黙って抱き合っていた。登紀子の嗚咽が聞こえてきた。その嗚咽は次第に大きくなってきた。祐子は賢の耳元で囁いた。

「あなた、わたしよ。分かるかしら」

賢はまだ意識が定まらないようだった。耳から入る音を判断し兼ねた。

「あなた、わたしよ、祐子よ。戻って来れたのよ」

賢の意識は漸く祐子の声と、そしてその姿を捕らえた。

「祐子、どうして・・・」

まだ、自分の状態が認識できていないようだった。

「あなた、あなたは消えていたのよ。もう1月になるわ」

そう言うとき祐子はまた涙が込み上げてきた。ふたりは抱き合ったまま話をした。

「俺はどうしたんだろう。確か、フェリーで……そうだ、亜希子さんはどうした？」

「亜希子さんも戻って来たわ」

賢は軽く頷いた。

「フェリーの甲板のデッキで海の老人と話をしていた、急に意識が遠くなったんだ。それからは……」

その時、亜希子が小さな声で登紀子に言った。

「お母様、わたくし、どうしてここに……」

登紀子の嗚咽も漸くおさまった。

「*****」

「お母様、わたくし海に飲み込まれてしまったような気がしたのよ」

「よかった。亜希子、あなたが居なくなって……わたくしたちは……どうしてよいか……分からなかった」

賢と亜希子は自分達がいる場所と状況が把握できなかった。この世界の時間はフェリーの上で完全に止まっていた。

「たった今、意識が朦朧としたと思ったら、突然ここにいる、しかも祐子がいる」

「わたくしも、「海に引き込まれた」と思った次の瞬間におかあさまの腕の中にいるの。まだ、混乱しているわ」

賢を抱擁から解き放つと、祐子が浴衣の襟元を合わせながら言った。

「あなたと亜希子さんは1月前にここ、鹿児島湾の垂水行きフェリーの中で失踪したのよ。そして、1月後にこの垂水のホテル江陽館のお母様とわたしの宿泊しているお部屋に現れたのよ。お母様とわたしが亜希子さんとあなたを呼び寄せたの。見て、わたし汗びっしょりよ。とっても疲れたわ。お母様もきつととてもお疲れだと思わ。ねえ、お母様」

登紀子が頷いた。

「亜希子、みんな祐子さんのおかげよ。祐子さんがいろいろ調べてくださって、わたくしにも意識の力で貴女を呼び戻す方法を説明してくださったのよ」

祐子がテーブルを部屋の中央に戻し、周りに4枚の座布団を並べながら言

った。

「あなたと亜希子さんは、先ず何か存在を確定できるようにした方がいいわ。とりあえずお茶をいただいでください」

そう言うのと、祐子は床の間に移しておいた4つの湯飲み茶碗にティーバッグを入れ、ポットの湯を注いだ。そして、それぞれのティーバッグを湯飲みの中で2、3度左右に踊らせてから取り除いて空の湯飲みに移し、先ず登紀子に、次に亜希子に、そして賢に、最後に自分のいた場所に置いた。その立ち振る舞いの柔らかな物腰は、まだ興奮が冷め切っていない登紀子の目にさえ気品に満ちた姿に映った。賢が、祐子はいつの間にかこんなに上品な振る舞いができるようになったのだろうと思ったほど、穏やかで凜としていて身体の動きに無駄が無かった。祐子は自分の席に戻ると、

「おかあさま、お疲れになられたでしょう。お茶をお召し上がりくださいませ。亜希子さん、賢さん、お茶をいただいで、お茶が身体に流れ込むのを意識してください」

と言った。賢はまた、驚いた。いつも「わたし、分からない」と言って、甘えていた祐子が急に別の存在になったような気がした。賢と亜希子は祐子に促されて恐る恐る湯飲みの茶を啜った。登紀子の顔が綻んだ。

「皆さんにお伝えするわ。このたび祐子さんはわたくしたちの娘になりましたのよ。亜希子にはお姉様ね。いま祐子さんはわたくしたちの家に住んでいるのよ」

賢は登紀子の話している内容が直ぐには理解できなかった。亜希子も母が何を話しているのか分からなかった。

「祐子さんは生まれて直ぐに、ご両親を亡くしてしまったの。祐子さんのご両親とわたくしたち夫婦はとっても親密なお付き合いをしていたのよ。つい10日ほど前にそのことが分かって、祐子さんにわたくしたちの養女になっていただくことにしたのよ。正式にはこれから籍を移していただくことになるわ」

「わたくしとっても嬉しくて、だって生まれて初めてお母様とお呼びすることができたのですもの」

驚いて話をじっと聞いていた亜希子が言った。

「祐子さんがお姉様になるのね、嬉しいわ。ふつつかな妹ですけどよろしくお願ひ致します」

「亜希子さん、わたしこそ至らない姉ですがよろしくお願ひ致します」
登紀子はふたりに微笑みかけた。

「これからは姉妹として、仲良く暮らしてね」

「はい、お母様」

祐子と亜希子は同時に応えた。賢は、成り行きははっきりしないものの「良く似合った姉妹が出来たものだ」と思った。登紀子にはここにこしながら言った。

「さて、これからいろいろ忙しくて、とっても楽しいわね。先ずみんなでお風呂に行きましょう」

賢は時間を確認するように腕時計を見た。

「やはり時間は止まっていたんだ。フェリーに乗った頃の時刻になっている」

3人の女性が賢の方を振り向いた。亜希子がハンドバッグから携帯電話を取り出した。

「携帯の日付があの日の日付になっているわ。それに電池も切れていないの」

「直ぐに現在の時間になるよ。携帯は定期的に自動で時間更新されるはずだから」

賢が言った。皆、顔を見合わせた。

「不思議ね」

祐子はそう言うと、少し間をおいてフロントに電話し、宿泊人数追加の変更と賢の部屋の確保を頼んだ。幸いまだ部屋は空いていて、賢の部屋はすぐに用意された。暫くして仲居が婦人用の浴衣と、宿泊具1式を持って来た。最上級のサービスを申し込んであるだけのことはあって、対応が迅速だった。仲居が何か特別に食事を用意するかと尋ねたが、それは断って、翌日の朝食を4人前に変更して欲しいとだけ頼んだ。11時を回っていた。賢は3階の315号室に移動した。既に床が延べてあった。賢は浴衣に着替えると直ぐに1階の大浴場に向かった。途中で3人に出会った。明日の

朝7時に朝食の広間で会うことにして分かれた。賢の時間感覚から見ると、ほんの4、5時間をスキップして宿に着いたという感じだった。賢は兎に角よかったと思った。亜希子と自分が消えていた間、恐らく多くの人たちが自分たちのことを心配して、様々なことをしてくれたに違いないと思った。明日、お礼とお詫びをしようと思った。今朝、飛行機で鹿児島に着いたような気がする。湯船に浸かりながら、自分が消えていた時、一体どういう状態だったのだろうかと思うと奇妙な感覚に襲われた。亜希子は何度もこんな経験をしてさぞ辛いだろうと思い、また、最も大切に思っている祐子がどれほど悲しんだことだろうと思うと、祐子に対する恋しさが募ってきた。一体どうして藤代肇・登紀子夫妻は祐子を養女に迎えようとしたのだろうか。特別の意図があるのだろうか。それとも亜希子が失踪したので祐子に近くに居て欲しいと思っただけなのだろうか？祐子は原智明のことを調べているのだろうか？野岸孝子から連絡はあったのだろうか？次から次にいろいろなことが思い浮かんでくる。かつてこんなに思考の波に翻弄されたことはないと思った。「思考は狂った猿の如しとはよく言ったもんだ」と思った。それにしても、何故自分は失踪したのだろうか？原智明のことを調べながら自分たちのケースに対比してみようと思った。風呂から部屋への帰り道では3人には出会わなかった。賢は少しほっとしたような気がした。「今日はぐっすり休める」と思った。

「わたくし、また消えてしまったらどうしようかと思うと昨日は怖くて熟睡できませんでした」

朝の挨拶を交わした後、亜希子が賢の方を向いて言った。

「眠りに落ちそうになると、急に恐怖心が湧いてきて眠気が飛んでしまったの」

登紀子と祐子はにこにこしながら亜希子の方を見ている。どうやらこの話を何度も聞かされているようだった。

「亜希子さん、今日はいいのよ。わたくしたちが手を握っていてあげるから安心してうたた寝してもいいわよ。ほほほ」

亜希子の母は声を立てて笑った。登紀子は昨日部屋に戻ってから夫に電話

を掛けた。藤代肇は驚喜した。すぐに鹿児島に来ると言った。続いて祐子が数馬と亮子に電話した。ふたりは本当に喜んだ。亮子が涙ぐんでいるのが声の調子で分かった。次に、祐子は橘に電話を掛けた。橘も非常に喜んだ。早速明日どこかで会えないかと言ったが、祐子は午後はこちらから研究会に伺うと答えた。昨夜は警察への連絡はしなかった。呼び出される可能性があったからである。それにどのように出現したのかを説明できる自信が無かった。説明の仕方によっては一大センセーションを巻き起こす可能性を孕んでいた。4人は歓びを噛みしめながら朝食を共に摂った。登紀子は始終微笑んでいた。部屋に戻ると賢が自分たちの始末の付け方について3人に話した。

「警察への報告はこんな風にしたいと思います。僕と亜希子さんは一緒にフェリーに乗った。小雨が降っていたが海を眺めたくてデッキに出た。その時甲板が滑りそうだったので靴を脱いだ。ふたりで海を見つめていた時、急に意識が朦朧として来てそのまま意識を失った。その後のことは分からない。再び気付いた時、登紀子さんと祐子さんの泊まっているホテルの部屋にいた。これはありのままのことです。もし、話の中に真実と異なることを入れると矛盾が生じてきて、虚構を維持するのに無駄な努力を払わなければならないようになりますから」

祐子が言った。

「わたくしも賢さんの言う通りだと思います。それに、これ以外に説明のしようもありませんわ」

登紀子が言った。

「確かにそうですわね。でも、それを聞いた人たちはきっと奇異に感じると思いますわ。そこを何とか繕うことはできないかしら」

亜希子が言った。

「でもお母様、ありのままがよろしいと思います。もっと不思議な部分もあるのですが、その部分は話さないで、これからいろいろな人たちに質問されても「分かりません」で通せると思いますし、多分この事件は不可解な事件ということで終わると思います」

賢がそれを受けて言った。

「僕たちが失踪した後のことは、多分「海に落ちて、垂水かどこかの海岸に打ち上げられて、その後どこかを彷徨っていて、偶然ホテルのこの部屋に来た」なんていうことは想定できないと思います。・・・それで、不可解ということになると思います。もし質問を受けても、僕と亜希子さんは、ただ「分かりません」と応えるだけでいいのではないかと思います」

祐子は警察に電話を掛けた。捜査課に賢と亜希子が見つかったことを報告した。捜査課の担当者は祐子の説明に対し、もう少し質問を継続したいようだったが、後ほど報告に出向く旨を伝えると直ぐに納得した。藤代肇が来るので江陽館にはもう一泊することにした。亜希子がフェリーに乗りたがらないため、タクシーで鹿児島湾を回って鹿児島警察署に出向いた。警察では捜査課の担当者の他4人の捜査官が立ち会った。先ず祐子がふたりが出現した時の状況を話した。

「わたくしと藤代登紀子さんがホテルの部屋で寛いでお祈りをしておりましたとき、ふと気付くと内観賢さんと藤代亜希子さんが現れていました」一人の男性の捜査官が質問した。4人にはこの男性がこの事件の担当責任者であるらしいことが分かった。

「どのようにして現れたか、もう少し詳しく説明して頂けますか？」

「お祈りは、ふたりが戻るように祈念して意識を集中しただけです。そのほかには何もしておりません」

「それは不可解ですね。藤代登紀子さんと仰いましたね。今崎野祐子さんの仰ったことは確かですか？」

「はい、その通りでございます」

「それでは、失踪していた内観賢さんと藤代亜希子さんのどちらかが、崎野祐子さんと藤代登紀子さんの前に現れた時の状況を説明してください」賢が答えた。

「わたくしはフェリーの上で意識を失ってからのことは何も覚えておりません。ただ、気が付いたときは祐子さんと藤代登紀子さんの泊まっているホテルの部屋のおふたりの前にいたということです」

「藤代亜希子さんも同じですか？」

「はい、その通りでございます」

「それでは、内観賢さんと藤代亜希子さん、フェリー上で失踪されたときの状況を説明していただけますか？」

賢が答えた。

「はい、わたくしはレンタカーで垂水行きフェリーに乗りました。乗船を済ますと、亜希さんとともに直ぐに車から降りて船室に向かいました。船室に入ると、海が見たくなってふたりで甲板に出ました。小雨が降っていましたので、滑るといけないのでふたりとも履き物を脱ぎました。デッキで海を見ている時、意識が朦朧としてきて、その後のことは分からなくなりました。気が付いたら、ホテルの崎野祐子さんと藤代登紀子さんの宿泊している部屋にいました」

「藤代亜希子さんと同じですか？」

「はい、その通りです」

「その間の記憶は無いのですか？」

亜希子が答えた。

「はい、全くありません」

「どうして麦わら帽を被って車から降りたのですか？」

「特に理由はありませんが、車から降りるときはいつも麦わら帽を被っていたもので」

賢が答えた。捜査官達も、これ以上どう質問して良いのか途方に暮れていたが、記録を取っている者がペンを置いたのを契機に係官が言った。

「それでは、この事件は解決ということで報告書を提出します。一部論理的に解釈できない部分が残りますが、傷害事件でも物損事故でもありませんので、今説明を受けた内容のままに報告書を作成します。4人は深々と頭を下げて礼を言ってから警察署を出た。それから調査会社に寄り、警察に対して話したのと同じ簡単な説明をした。調査会社の担当者も不可解な印象を拭えないようだったが、ふたりの説明以上の質問をすることはできなかった。彼らの疑問はふたりが失踪した後、どうしていたかという点だったが、記憶を失っているという殺し文句がその後の質問の余地を奪ってしまった。祐子と登紀子は歓びで満たされていた。賢と亜希子はまだはっきりした意識を取り戻せないでいて、亜希子は時々頭痛を感じていた。登

紀子の提案で4人は鹿児島市内のフランス料理のレストランで昼食を摂った。その後で登紀子は鹿児島駅前のデパートに寄って亜希子と祐子にブラウスとスカートを買ひ、亜希子には下着類も買って与えた。それから紳士服売り場に廻り、賢にもジャケット、ズボンと下着類を買って与えた。更に亜希子の為にトラベルバッグを購入し、それらをホテル江陽館に届けるように依頼した。その手際よさは、目を見張るものがあった。それだけのことをするのに僅か30分足らずでやってのけたのである。亜希子も祐子も新しい洋服が気に入って気が浮き立った。賢は特に意識に大きな変化は無かったが登紀子に対して感謝の気持ちを伝えた。祐子が

「お母様、これから原智明さんの研究会に伺いたいのですが、よろしいかしら」

と言うと、登紀子は快く承諾した。賢と亜希子もはっきりしない意識の中で承知した。研究会の事務所に入ると、既に馬場と橘が祐子達を待っていた。

「祐子さん、凄いことが起きたのですね。いま馬場所長と話していましたが、もしこのことを理論立てて説明できたら世界の常識が変わりますよ」祐子は微笑んで、

「まず、紹介をさせてください。こちらが藤代登紀子さん—わたくしの母です。こちらがわたくしの親友の内観賢さんとわたくしの妹亜希子さんです」

祐子は賢と亜希子の方を振り返り、3人に馬場所長と橘を紹介した。

ふたりは祐子が亜希子のことをさん付けで妹と紹介したことに、少し違和感を覚えたが、それぞれに儀礼的な挨拶を交わした後で馬場が言った。

「内観さん、亜希子さん、無事なご帰還おめでとうございます。わたくしたちも今、興奮の真っ直中にいます。おふたりのお話は祐子さんから伺っております。是非当研究会の会員になって頂きたいと思います」

賢は朦朧とした意識の中ではあったが、この研究会に入会することの重要性ははっきり認識できた。

「はい、是非入会させていただきたく思います。亜希子さん、貴女も入会させていただきますか？」

「はい、わたくしは賢さんに従います」

祐子は少し心が乱されたが、以前ほどの不快感は覚えなかった。馬場が机の引き出しから申込書を2通取り出して賢と亜希子に渡した。ふたりはソファに腰掛けると住所、氏名を書き掛けた。祐子が

「賢さん、住所は亜希子さんと同じ住所にしてね」

と言った。

「えっ？ どうして？」

「賢さんの部屋の荷物を整理して、亜希子さんの家の倉庫に預かっていただいているのよ。もう、アパートは契約解除してしまったの」

賢は朦朧とした意識で、以前祐子と話したことを思い出そうとした。確か、祐子は自分のアパートに引っ越して来るように言っていたはずだ。賢は登紀子に向かって丁重に礼を言った。

「いろいろありがとうございました。東京に戻りましたら、当面はホテルを住所にしようと思います。すぐに荷物は整理致しますので」

登紀子は言った。

「そんなことはよろしいのですよ。倉庫は十分なスペースがありますから、内観さんが新たなお住まいにお移りになるまで預からせていただくわ。それに、ホテルにお泊まりならずに、わたくしどもの所にいらしたらよろしいわ」

「ありがとうございます。でも、それではあまりにも・・・」

「ご遠慮なさらなくてもよろしいのよ。お部屋はいっぱいありますから」
亜希子が嬉しそうな顔をした。祐子は少し複雑な気持ちだった。賢は亜希子と同じ住所を記入して申込書を馬場に渡した。馬場の説明の後、祐子と登紀子が馬場に入会金と会費を支払った。

「これで新たにふたりの会員が誕生しました」

馬場が宣言した。

「お疲れのところ申し訳ありませんが、失踪したときのことを少しお聞きしてもよろしいでしょうか？」

橘が訊いた。賢がゆっくり話し始めた。

「これから話す事は、警察には話していない内容が含まれていますので、

警察やその他の人たちに対しては、何も聞かなかったということにしてください・・・私と亜希子さんがフェリーに乗ろうかどうしようかと迷っていて、一旦車を駐車場に置きフェリーの案内所で時刻表を見ていた時、一人の少年が寄って来て私にメモをよこしたのです。「道を歩いていたら、どこかのお爺さんが、小父さん達がフェリー乗り場に来るから渡して欲しいと言ってこの紙をよこしたんだ」と言うのです。どうして自分たちのことが分かったか聞いたのですが、「お爺さんが小父さん達の服装を説明したのですぐ分かった」と言っていました。私たちはそれが宍道湖で会った老人だとぴーんと来ました。そのメモには「フェリーで垂水に渡って来なさい。重要なことを教えよう」と書かれていました。そこで、わたくしたちはフェリーで一旦垂水に渡り、そこから南下して錦江町で再びフェリーに乗り指宿に行こうと考えました。フェリーに乗るとその老人が宍道湖ではボートに乗って現れたことを思い出し、きっとまたボートでフェリーの近くを走って来るのじゃないかと考えました。それで、宍道湖で会った時にわたくしたちが被っていた麦わら帽子を目印にと思い、帽子を被って車を降り、一旦船室に入ってそれから甲板に出たのです。そこで、その老人に会えると思っていました。雨が降っていて危なかったので、滑らないように裸足になりデッキに捕まっていたのですが、急に身体が軽くなったと思ったら意識がなくなりました。そして、気が付いた時には登紀子さんと祐子さんのいるホテルの部屋にいたという訳です。でも無意識の中でわたくしは祐子さんに強く呼ばれていることを感じました。それに自分も必死に応えた記憶はあります」

「わたくしも大体同じなのですが、意識を失った後、母がわたくしを呼んでいるのが分かりました。でも、内観さんと一緒にいるのだという意識が交錯していて、なかなか集中できなかったように思います。それから急に内観さんが遠くに消えたように感じ、何とか母に縋り付こうと必死になった途端、母のいる部屋に現れていました」

馬場が言った。

「それは凄い。意識の力で出現できたということですね。確か原智明さんの言葉にもありました。第31番目の項目ですね。想念の具現です。あな

た方がひとつの具体的な事例を示してくれましたから、これからますます原智明語録の重要性が明らかになってきますよ」

馬場はやや興奮気味に言った。4人は馬場と橘に礼を言って事務所を出た。ビルを1階まで降りると祐子の携帯電話が鳴った。

「もしもし、祐子ですが」

祐子は相手が誰か分からなかった。

「もしもし、遠野の野岸孝子の娘ゆきと申します。内観さんからこちらにお電話するようと言われておまして」

祐子はやっと分かった。

「あの失踪された野岸孝子さんの娘さんですね」

「はい、内観さんに電話を掛けたのですが繋がらなくて、それで、内観さんが崎野さんに電話するように仰っていたのを思い出したものですから」

「どうかなさったのですか？」

「いいえ、今度お休みが取れることになりまして、そのお休みで弟たちを東京に連れて行ってやろうと思まして」

「もしもし、今ね、内観さんここにいるんですよ。ちょっと替わりますね」祐子は賢に携帯電話を渡した。

「もしもし、ゆきさんですか？内観です。お元気ですか？」

「はい、私も、太郎も、信次もみんな元気です。内観さん、11月の第2週の土曜日と日曜日に続けてお休みをいただけたんです。弟を連れて東京に行こうかと思まして」

「そうですか。それじゃ、土曜日の朝早くに出ていらっしやい。初めに東京見物をして、次の日にディズニーランドに行きましょう」

「えっ！ディズニーランド？連れて行ってくれるんですか？嬉しい！夢みたい」

「うんそう。一寸大変だけど、新幹線で東京まで来れば、僕が東京駅で待っているから、後は僕に任せておけばいいよ。泊まる所も心配しなくていいよ」

「本当にいいんですか？わー嬉しい！」

電話口で太郎と信次のわーわー騒ぐ声が聞こえてきた。

「今、僕は鹿児島に居るから、東京に戻ったら詳しいことを連絡するよ」
「ありがとうございます。それじゃ、内観さん、電話待ってます。あっ、一寸待ってください、太郎が・・・」
「もしもし、お兄ちゃん、僕分かる？お兄ちゃん、ディズニーランド連れてってくれるの？」
「もしもし、太郎君、ディズニーランド行こうな。君たちが来るのを待てるからな。信次君も一緒にな」
「それじゃ、よろしく・・・あっ、信次が」
「もしもし、お兄ちゃん、・・・僕元気だよ。・・・ディズニーランドたのしいな」
「信次君、元気か？ゆき姉ちゃんの言うことを聞かなきゃいけないよ」
「うん」
「もしもし、内観さん、それでは、よろしくをお願いします」
他愛もない電話だったが、話している間に賢の意識が少しずつクリアになって来た。ゆきや子供達の歓びの感情が話し声を通して直接伝わって来た。4人はタクシーに乗ると空港に向かった。藤代肇が到着するのを迎えるためだ。
出口から現れた藤代肇の顔は口元が綻んでいて、何とか威厳を保とうと無駄な努力をしているのが直ぐに分かった。
「亜希子、それに内観さん、無事だったのか。良かった」
「お父様、ご心配をお懸けしてしまいました」
「ご心配をお懸けして、申し訳ありませんでした。それに手を尽くして探していただき、何とお礼申し上げて良いか分かりません」
「まあ、まあ、よかった。それに祐子も来てくれたんだね」
「はい、お父様。わたくしもとても嬉しくて」
そう言うと祐子の瞳に涙が浮かんだ。その祐子の涙を見て、亜希子の目から大粒の涙が流れ落ちた。亜希子の意識もようやくクリアになってきていた。
「あなた、祐子さんがとても頑張ってくださいったのよ。わたくしたちの娘になっていただいて良かったわ」

「そうだな、こうしてみると亜希子と祐子は良い姉妹だな。・・・兎に角、どこかお茶を飲めるいい場所はないか？」

祐子が「聞いて参ります」と言って早足で旅行案内の方に向かった。祐子は直ぐに戻って来た。

「鹿児島に向かう途中に、飲み物をいただけるレストランがあるとのことです。タクシーも2台頼んで参りました」

賢は祐子が相変わらず機転が利くと思った。

「祐子、ありがとう。そこに行って一休みしよう。いろいろ話も聞きたいし」

賢が藤代肇の荷物を持つと、5人はタクシー乗り場に向かった。タクシーは直ぐに来た。藤代肇と登紀子が最初の車、亜希子と祐子が2台目に乗り、賢は祐子達のタクシーの助手席に乗った。空港から10分ほどで国道沿いにあるブルースカイ・エアポートという名のレストランが見えた。4時過ぎだった。食事の時間帯から外れていたためか席は空いていて、入り口付近のテーブルに3人の若い男性客がコーヒーを飲んでいるだけだった。ウェイトレスが窓際の2つのテーブルを寄せて8人掛けの席を用意してくれた。全員席に着くと藤代肇が口を開いた。

「ところで、どうして帰還できたかなどと聞くと、具合が悪いかな？」

亜希子が答えた。

「お父様、プロセスがすこし変わっているから、分かっていたのかしら」

賢が引き継いで話した。

「わたくしが説明させていただきます。多分、亜希子さんとわたくしは、何らかの力の影響を受けて、別の時空間に移動してしまったのだと思います。その時空間に居る間、この現実世界から見た時間も、空間も存在していないので、わたくしたちのことを誰も認識できなかったのだと思います。その時空間から抜け出す為には、ある種のエネルギーが必要で、そのエネルギーを奥様と祐子さんからいただいて、わたくしたちは帰還できたのだと思います」

「ふむ、難しいな。もう少し分かりやすく説明してくれないかね」

「わたくしにもチンプンカンプンなのですわ」

と登紀子が言った。

「先ず、世界には見える世界と見えない世界があると思ってください。普段わたくしたちが認識しているこの世界は見える世界です。見えない世界はここと同じ場にあるのですが、見える世界に存在している物でも何らかの特殊な力が働くと、その見えない世界に移動することがあるようなのです。そして、その見えない世界から戻って来るためには、同じような力の作用が必要だと思われるのです。わたくしたちはこの見えない世界に移動してしまったようなのです。そこから戻って来られたのは、奥様と祐子さんがわたくしたちを呼び戻そうと必死になって祈ってくれたからだと思います。その力を頼り、亜希子さんもわたくしも必死に戻ろうとしたから、帰還できたのだと思います」

「それは思いの力のようなものかな」

「それに近いと思います。しかし、もっと強い力が必要だと思います」

「わたくしたちが生きてきた時代には考えられなかったことが起きているんだな」

「はい、どうやら最近はそういうことが発生しやすい状況にあるようです。多分、以前にもあったと思うのですが、それができる人は奇跡を起こす人だと思われていたのではないかと思います」

「君や亜希子にはそれができるんだな」

「いいえ、意図的にできるわけではありません。まだその原理も理解できていませんから、どうやれば別の次元に移れるのかは分かりません」

「亜希子、お前も内観さんと同じように思っているのか？」

「はい、お父様。わたくしは内観さんのおっしゃる通りだと思っております」

藤代肇は亜希子が心底賢に傾注しているんだと思った。

「祐子、おまえはそういう経験をしたことがあるのかね」

藤代肇の祐子への声音が実の娘に言うように柔らかく響いた。

「いいえ、お父様。わたくしには内観さんがわたくしの前から消えてしまったり現れたりしたという経験はありますが、自分が別の時空間に移ると

いう体験をしたことはありません」

「普通はそうだな。わたしも60年ばかり生きてきたが、こういう経験はしたことがない。いずれにしてもめでたいことだ。今夜はふたりの帰還の祝賀会をやろう。それから、明日の朝、別のホテルに移った方がいいだろう。新聞社やテレビ局が聞きつくと厄介だ」

「そうですね。指宿のホテルでも取りましようか」

登喜子の言葉に、間髪を入れずに祐子が言った。

「お父様、わたくしが予約を致しますわ。少し席を外させていただきます」

祐子は携帯電話を手に素早くレストランを出て、少しして戻って来た。

「お父様、指宿のホテルが取れました。スイートルームと普通の部屋を予約しました」

藤代肇が満足げに言った。

「ありがとう。祐子は手際がいいな」

全員が同じように感じた。

祝賀会は午後6時から鹿児島市内の中華レストランで行われた。祐子と亜希子はホテルに着くとシャワーを浴び、登紀子が購入してくれた新しい服に着替えた。賢も新しい服を身に着けた。

パーティはシャンパンのオープンから始まった。全員が飲びに満ちていた。

藤代肇が初めに話した。

「今日はとても飲びに満ちた日だ。わたくしと妻は万が一亜希子が戻らなかったらどうしようかと思ひ悩んだ。そんな折に祐子が現れ、わたくしたちの娘になってわたくしたちを支えてくれることになった。祐子はとても優しく、賢い娘だ。それでも亜希子を失った心の痛みは癒えなかった。昨夜妻から内観さんと亜希子が見付かったとの連絡を受け、わたくしは驚喜した。みんなも同じ気持ちだろう。今日は心置きなく楽しむように。それでは、乾杯をしよう」

藤代肇の言葉から始まった宴会は全員の歓喜によって盛り上がり、2時間に渡って続いた。

翌朝藤代肇と登紀子は帰京した。昨夜、東京の本社から緊急の電話が入ったのだ。直ぐに帰社しなくてはならなくなった。登紀子も一緒に帰京する

ことにした。亜希子は残りたいと言ったが、両親は休養が必要だと言って強引に連れ帰った。祐子も藤代肇から一緒に帰るように促されたが、もう少し調査を継続したいと言い、残ることにした。賢の立場は微妙だった。東京に戻るのは中途半端だと考えた。「このまま帰京すると、自分は何のために鹿児島まで来たのか分からない」と全員に説明した。祐子の進めた調査の経過についても知りたかったし、それに何より祐子とふたりきりになりたかった。東京に戻ったら、もう祐子と自由に会うことが難しくなることも懸念材料だった。祐子も全く同じことを考えていた。藤代家の3人を空港に見送ると、祐子は直ぐに指宿のホテルに電話を入れてスイートルームをキャンセルし、別の部屋を一部屋確保した。ふたりはバスで鹿児島市内の研究会に向かった。バスは空席が多く賢と祐子が隣同士に座ることができた。祐子は賢の目を見て微笑んだ。賢も口元を和らげた。

「やっとふたりきりになれたね」

そう言うと祐子は賢の手を握った。ふたりは鹿児島駅前で降り、そこから研究会の事務所まで歩いて行った。手を繋ぎ、祐子が賢に身体をぶつけて来ては跳ね返るのを繰り返す様子は、さながら幼児が親に戯れてでもいるかのようであった。

「心配掛けたな」

「うん、わたし必死だったのよ。生きるか死ぬかの問題だったから。結果的に、なんかとっても知恵者になったような気がするわ」

「ほう、どんなこと？」

「原智明さんって、天才的な人だったのよ。特に数学の力がずば抜けていたよね。・・・あなたに話したいことが一杯あるのよ」

ふたりが研究会の事務所に入ると、馬場と橘の他に一人の少年が居た。祐子が元気よく挨拶した。

「おはようございます」

所長が言った。

「崎野さん、それに内観さん、今日は必ず来てくれると思っていました。昨日あまり詳しいお話を伺えなかったから、お見えになるのを楽しみにしていました。今日は、亜希子さんはお見えにならないんですか？」

祐子が答えた。

「はい、東京に帰りました」

「お疲れになったんでしょうか？」

今度は賢が答えた。

「はい、意識が普通の状態に戻るのに半日掛かりましたが、体力的にはかなり消耗していると感じます。亜希子さんも同じだと思います」

「まあ、お座りになってください」

橘が厨房から麦茶を2杯持って来て、センターテーブルに置きながら言った。

「祐子さん、今日は随分楽しそうですね」

「はい、賢さんと亜希子さんが戻ったので、わたくし嬉しくて・・・所長さんと橘さんにはいろいろお世話になりました」

馬場が言った。

「本当によかった。・・・ところで内観さん、別の時空間にいた時のことを伺いたいのですが」

「どうぞ、僕の分かることなら何でも話します」

「助かります。まず、時間ですが、腕時計をしていましたか？」

「はい、戻った時は消えた時と大体同じ時刻だったと思います。つまり、一月も経っているのに、あちらの時空間では時間が経過していなかったようなのです」

「やはりそうでしたか。以前航空機が消滅して、再び出現したという事件が起きた時も、消滅していた間の分だけ時計が遅れていたと聞いていましたから、多分そうだと思います」

「もう一つ、気が付いたことがあるんです。亜希子さんの携帯電話の電源が入りっ放しだったんですが、電池が消耗していなかったようです。それに、やはり携帯のカレンダーは消滅した日を示していました」

「電源が入っていたけど、時計は進まなかったということですね」

「そういうことです。僕は、あちらの時空間では時間が停止しているかまたは進み方が非常に遅いんじゃないかと思うんです。ただ、確かにこちらの世界と同調できるように意識は普通に働いていたようですから、時間経

過が無いとみるのが正しいように思うんです。この世界の時間と空間の捉え方が間違っているんじゃないかとも思えるのです。死後の世界と同じじゃないかと思います」

「この世界の時間の過ぎ方が可笑しいと考えるのですか？」

「いいえ、時間の経過と捉えているのは実は経過ではないんじゃないかと。僕らはすべて5感を通して物質や現象を捉えているでしょう。時間は人間の脳が作り出した錯覚なんじゃないかと」

「しかし、時計が時を刻んでいるじゃないですか？」

「時計も物質で時計の時間経過を示すものも現象ですから、脳の錯覚を人類は共通の認識にしているんじゃないかと思うんです。確かに時計は便利ですけどね。そして、あちらの時空間では誰も光を通して見ていない、誰も感覚で認識していないから、5感で捕らえられるものは何も存在しない、時間や空間さえも存在しないんじゃないかと思うんです。しかし、意識が働き掛けることで活動する脳のような物体を構成できれば、あちらの時空間でも時間を作り出すことができるような気がします」

「なるほど、そうとも言えるわけですね。内観さんも原智明さんと同じような鋭い洞察力がありますね。脱帽です」

祐子は賢の顔をじっと見つめていた。賢が理論を展開する姿が好きだった。逞しく感じた。

「内観さん、貴方は原智明語録を見たことがありますか？祐子さんにはお見せしたんですけど」

「はい、目黒の支部で拝見させていただきました」

「実は目黒には30項目しか置いてないのです。それ以降の部分は悪用されると危険なので、本部でわたくしが管理しているのです。ご覧になりますか？その中に今の議論が一部含まれています」

「そうなんですか。それは是非拝見させていただきたく思います」

馬場は書棚から語録集のファイルを取り出して来て、センターテーブルの上に広げた。馬場は賢が読み易いように資料の向きを変えて「どうぞ」と言った。賢はページを繰っていった。初めの30項目は既に見覚えのある内容だったが、31項目目になったときに賢は身体を乗り出してじっと見

入った。

「これが、昨日仰っていた31番目の言葉ですね。「想念の具現」か。ここに書いてあることと第21から23項目が、実際我々が体験したことだと思いますね。それにしてもこの数式はどうやって導いたのでしょうか？」

「原智明さんの数学能力は我々の考えの及ばないものだと思います。数学だけじゃないですけど」

賢は暫く31番目を覗き込んでいた。祐子が賢に身を寄せて、体を賢の腕に押しつけるようにして覗き込んでいる。橘がその祐子の姿をじっと眺めていた。その時、部屋に入った時に居た少年が厨房の方から出て来た。賢も祐子も今までそこに少年がいたことをすっかり忘れていた。

「小父さん達、原智明さんのこと知っているの？」

馬場が言った。

「この子は2年前に、原智明さんに助けられたことがあるんですよ。海水浴で沖に流されて行方が分からなくなった時、大勢の人が出て捜索をしたんですが見つからなかった。暫くして、原智明さんがこの子を背負って海水浴場に現れたんです。みんな沖を探したけれど、原智明さんはずっと離れた海岸に打ち上げられたこの子を見つけて、人工呼吸をし、息を吹き返らせて救ったんです。何でも潮流の向きが水面と深い部分とは異なっていて、深いところを流れている潮流がそこから1キロほど先の海岸付近に吹き出して来ることを見越していたようです」

「ぼくも、原智明さんの言葉知っているよ」

少年が言った。

「ずっと前から、「ごくみが大切だ、しっかりしろ」って言ってたよ。原智明さんが、ごくみって生きることだって言ってたよ」

賢が言った。

「君は小学生かい？」

「うん、小学4年生だよ」

馬場が祐子の方をちらりと見て言った。祐子は少し開きかけていた膝を閉じて賢から離れた。

「この子の言うずっと前っていうのはどうも過去世のようで、まだ記憶が

残っているようなんですよ。話を聞いていると、この「ごくみ^ごが大切だ」と言う言葉で、どうやら戦争か何かの争いの時の情景を思い出すようなんです」

「そうなんだ。ぼくは山軍にいてね。弟と戦ってたんだ。僕の軍には谷村の叔父さんたちがいて、弟の海軍には矢角の叔父さん達がいたんだ。矢角の叔父さん達と戦うのはいけないことだと思っていたら、お爺さんが、「ごくみ^ごが大切だ、しっかりしろ。おまえは何故戦っている？」って言ったんだ。そのことばで僕はもう一度頑張って、必死に叔父さんと戦って勝ったんだ」

祐子が独り言のように言った

「ごくみ^ごって何かしら」

賢は一通り語録に目を通すと、ファイルを閉じて馬場に返した。ふたりは馬場と橋に礼を述べて事務所を出た。

外に出ると、祐子は賢の左腕に自分の右腕を絡ませた。

「祐子、おまえ大きくなったな」

賢は祐子に明るい輝きを感じた。祐子は以前にも増して美しく、眩しかった。

「いやーね、わたし体重変わってないわよ」

「いや、なんか堂々としていて、以前の泣き虫の祐子じゃないようだ」

「わたしをひとりぼっちにしておいたんだもの、もう涙も涸れちゃったのよ」

「豚骨ラーメン食べようか」

「うん」

既に12時を回っていた。

カウンターで豚骨ラーメンを食べながら、祐子が言った。

「あなた、鹿児島には縄文時代の遺跡があるのよ。あなたが垂水に向かったと聞いて、もし垂水に行くとしたら何か精神的なものを探求するのが目的だったのじゃないかと思ったの。それで、何か手がかりになるかも知れないと思って、橋さんに柗原（くぬぎぼる）貝塚に連れて行ってもらったの、発掘後に埋め戻されてしまっていたけど・・・それとラジュウム温泉

が細胞の変異に影響するかとも思ったりして、垂水の温泉に泊まったのよ。橘さん、高校の先生でDNAとかに詳しいの。ラジュウムがDNAに作用するなんて言っていたわ。でも、どちらも今ひとつあなた達を探す決め手に欠けたわね」

「祐子も大分探求心が旺盛になってきたな」

「違うわよ。あなたの足跡を追うのに必死だったの」

「うん、それで、なんでその貝塚に行ったんだ？」

「なんでも、岩偶と謂って祈祷か何かに使った軽石の発掘物が有名らしいの。その祈祷というところが、一寸関係するかも知れないと思ったのよ」

「あるいは、ここの3次元の環境が俺たちの失踪に影響しているかも知れないな。長い間の桜島の噴火とそれに繋がる精神作用が独特の時空間を作っているとかね」

賢が焼き豚を摘んで食べ麺を啜ると、祐子も合わせたように麺を啜った。

「海の老人と思われる人から伝言をもらったのが事の始まりだったんだ。どうして垂水に向かえと言ってきたのか今でも分からない。ただ、あそこの空間に導くのが目的だったのかも知れない」

「消滅させるために？」

「消滅を経験させるためさ」

「ねえ、今日は早めにホテルに行きましょ。ふたりきりになれたんだから」

「うん」

「身体は元に戻ったの？」

祐子は覗き込むように賢の顔を見た。

「うん、もう大丈夫だと思うよ」

祐子は顔を赤らめて伏し目がちになった。ラーメン店から外に出ると2人の大型カメラを持った男性に直面した。

「内観賢さんですね。無事帰還されたとのことですが、写真を撮らせていただけますか？」

祐子の返事を聞かずにカメラマンは写真を数枚撮った。祐子は

「すみません、まだ身体が安定していないので」

と言ったが、カメラマン達は祐子の言葉を気にも留めない。

「どこかに潜んでいたのですか？」

「海に落ちてから、どうやって助けられたのですか？」

と次々に質問を投げ掛けてきた。

「こちらがご一緒だった亜希子さんですか？」

「いいえ」

祐子はこの質問にだけははっきり答えた。ふたりはカメラマンから逃れるように小走りで大通りに出て、タクシーを拾おうとした。カメラマンは執拗に追って来た。祐子は咄嗟に、

「すべて警察でお話した通りです。警察から聞いてください」

と言った。

「あなたは、賢さんとはどういうご関係ですか？」

1台のタクシーが停まった。ふたりは急いでタクシーの客席に逃げ込んだ。

「お客さん、どちらまで？」

賢が言葉に詰まったとき、祐子が

「熱帯植物園までお願いします」

と言った。賢は祐子の顔を見た。祐子は済ました顔をしている。

「分かりました」

タクシーから降りると、祐子が

「あなた、ここ入ってこない？」

と言った。賢も祐子とふたりきりで歩ける静かな場所を求めている自分に気付いた。遊園地には沢山の温室があった。流石に晩夏の平日ここを訪れようという人はそんなに多くなかった。温室内は特に暑いという感じはなく、むしろ熱帯植物の間を、身体に枝葉が触れないようにしながら身体をくねらせて歩くのが心地良かった。祐子は賢の左手を抱き込んで歩いた。時々祐子の髪が賢の頬に触れ、シャンプーの香りが賢の感情を高ぶらせた。

「わたしね、いつか南の国に行ってあなたとふたりきりで暮してみたいわ」
椰子の木、サボテンなどが形良く植え込まれている。3つ目の温室の入口を潜り、少し奥まで入ると木々の葉で先の見通しが利かない処に来た。祐子は辺りをきょろきょろ見廻した。それはまるで少女が蝶の舞う姿を追っているかのように賢には思えた。祐子は黄金色に輝いている。以前の祐

子の姿に戻っている。周囲には誰も居ない。祐子が手前に茂っている木々の葉を押し分けて向こう側に出ると、賢は引っ張られるように後に従った。茂みを潜ると祐子はいきなり賢に抱きついた。ふたりは激しく口づけを交わした。賢は自分の興奮が高まるのを感じたが、これ以上高まるのはまずいと思って、直ぐにそれを抑えた。

「祐子、きれいだよ」

祐子は強く抱きついた。暫くふたりは抱き合っていたが、入り口に人の気配を感じて、賢は軽く祐子を引き離した。賢は左手で祐子の右手を取って前に進んだ。温室の中が急に暑くなったように感じた。

祐子は一度宿泊した石崎ホテルを予約していた。6日前にここに泊まった時は悲しみの真っ直中で、気もそぞろだった。祐子は6日前と同じ部屋に泊まりたかった。その方が賢の戻った喜びが強く感じられると思ったからだった。ホテルに着いた時間が早かったので、祐子の要望は聞き入れられ、同じ部屋を確保できた。熱帯植物園を出てからふたりは、記者の目を逃れるためにタクシーで南鹿兒島駅に向かい、そこで指宿枕崎線に乗った。

「あなた、わたしはこの前と同じ部屋に泊まれるわ。あなたはわたしの隣の部屋よ」

チェックインを済ますと祐子がフロントの女性から受け取った鍵を確認してから、賢にひとつ渡した。時間が十分あるのでふたりは砂湯に出掛けることにした。浴衣に着替えてからフロントで待ち合わせることにした。あのビジネスマン風の男に言い寄られた時に座っていたソファに腰掛け、祐子は賢を待った。この前と違い誰にでも話し掛けたいような、誰かに話し掛けられたいようなうきうきした気分だった。

「ここは砂湯の本場なんだわ」

少しして賢が降りて来た。

「祐子、待たせた？」

「うん、今来たばかりよ」

砂湯に入るには浴衣を着替えなければならなかった。ホテルが用意してある砂湯専用の欲衣は全裸になって身に着けなければならない。更衣室から出て来た祐子の姿を見て、賢は身体が反応してしまった。欲衣の下の祐子

の身体の線がはっきり分かった。祐子が賢の耳元で

「下は何も付けてないのよ」

と囁いた。折角意識を外の景色に向けようと努力をしていたところを、賢は再び腰の部分を目立たせてしまった。こうなると賢は早く砂の中に潜りたかった。賢がタオルで前を目立たないようにしながら砂蒸しの海岸に出ると係の女性が、

「いらっしゃいませ。おふたりですね。タオルを頭に巻き付けてください」と言って、既に掘ってある身体の2倍ほどの幅で、長さ1メートルほどの穴に入るように促した。賢は前を見られないように祐子の陰になって頭にタオルを巻いた。祐子がタオルを頭に巻く時に腕が賢の顔に触れた。いや、祐子がわざと触れたと言った方がよい。賢は下半身が係の女性に分からないように、穴に入る時は上半身を斜めにしながら素早く身体を横たえた。祐子は賢のそんな状態を見て今にも吹き出しそうだった。

「あなた、大丈夫？」

賢をからかいながら、祐子は自分も砂の穴に身を横たえた。係の女性が「よろしいですか？」と確認してから、少しずつ砂を掛けてくれた。ふたりとも程なく首から下は砂の中に隠れた。砂を掛けながら係の女性が言った。

「お客さん、海岸線に湯気が見えるでしょう。今、大潮でしかも干潮なんで、湯気が立つんですよ」

湯気の向こうに対岸の海岸線が見え、右手に3角形の開聞岳が見える。静かな景色だった。海の色は、まだ沈まないで残っている陽の光を受けて黄金色に輝いていて、海岸の砂のあちらこちらに上がる湯気を際立たせている。

「この摺ヶ浜（すりがはま）海岸だけなんですよ、干潮時になるとあんな風に砂浜から湯気が立ち上るんですよ。温泉が地下を通過して海岸に流れ出すらしいんです。大潮の時は干潮になると海水が引いて、温められた砂だけが残るでしょう。その砂が乾くと砂蒸しができるんですよ」

およそ10分程すると、祐子が

「あなた、一寸苦しくなって来たわ」

と言った。賢は意識を湯気に向けていて、心が静まってきていたので、も

う少しゆっくりしていたかったが、

「祐子、苦しくなったら出た方がいいよ」

と応えた。祐子は先ず手を外に出し、上半身を徐々に起こしてゆっくり砂から抜け出した。欲衣の周りに砂が着いている。ざらざらした小砂利のような砂だったので、手で払うと大きな固まりは残らずきれいに落とせた。祐子は襟を合わすと賢の近くに身を寄せた。祐子の姿が賢の目に飛び込んできた。胸から腿までのきゅっと締まった線がはっきりと分かる。賢は再び祐子の身体のイメージを頭の中に描いてしまった。「このままでは恥ずかしくて出られない」と思った。砂で押え付けられた下腹部が苦しくなってきた。

「祐子、先に内湯で砂と汗を流して来いよ」

「いや、あなたと一緒に行くわ」

賢は仕方なく目を瞑った。意識を原智明研究会に移した。海の老人の言葉と31番目の言葉の類似性を考えてみた。やがて次第に興奮が収まってきて、これなら出れると思った。

「あなた、何故目を瞑っているの」

「い、いや、一寸研究会のことを考えていたんだ」

目を瞑ったまま賢は起きあがり、できるだけ祐子の身体に視線を向けないようにして砂から出た。順番を待っている何人かの男性が一斉に祐子の姿に視線を向けた。祐子は上気して美しい上に艶めかしかった。賢は頭に巻いてあったタオルを手前に垂らして、急いでそこを出た。祐子が賢の左手を抱き込んで歩いた。賢はできるだけ研究会のことを考えるようにして歩いた。しかし、左腕に祐子の乳房を感じると、心が必死になって感情の高ぶりを抑えようとしたが、益々妄想に翻弄されてしまった。

「あなた、そんなに急がないで」

ふたりはエレベータに乗った。幸い誰も乗って来なかった。賢は我慢できなくなって祐子を抱きしめた。先に出ていた祐子の身体は少し冷めて、心地よい暖かさだった。エレベータが上階に着くと賢は急いでタオルを前が分からないように持ち直し、祐子を先に降ろしてからエレベータを出た。そこから少し歩くと内湯があった。簡単にシャワーを浴びて砂を落として

から、湯船に浸かった。既に4, 5人が入っていたが、賢は彼らに背を向けるようにして湯船に浸かった。湯船に入ると漸くほっとできた。祐子は賢が興奮しているのを知っていて、小悪魔的に賢が慌てるのを楽しんでいた。

「わたくしってコケティッシュな女かしら、ふふっ」

祐子は笑いが込み上げてくるのを堪えた。祐子は男達が自分に視線を向けているのを感じていた。祐子は微笑んだ。

「わたしの身体の線、また少し良くなったみたい」

祐子が内湯から上がると、賢がドアの外で待っていた。祐子は賢に駆け寄ると右手で賢の左手を取った。ふたりは再びエレベータに乗り、部屋のあある4階に向かった。エレベータに近い自分の部屋の前で祐子は賢に「あなたも入って」と言いながらドアの鍵を開けた。賢も従った。賢はまだ、さっきの興奮が冷め切れていない。祐子が鍵をロックすると、持っていたタオルを上がり框の上に投げ出して、いきなり祐子の腰を両手で抱き寄せた。ふたりは上がり框に上らずにその場で抱き合っって口づけを交わした。賢の手が下に動こうとしたとき、祐子は

「ちょっと・・・待って、・・・上がってから」

と言って、組み付いてくる賢の肩を両手で軽く押して離した。賢は手の力を抜いた。賢の息は疾走した後のように激しくなっていた。部屋に入るとトラベルバッグが畳の上に放り出してあり、浴衣を入れるトレイの中は掻き回したように雑然としていた。祐子が急いで浴衣に着替えて出て行く様子が目に浮かぶようだった。祐子はテーブルの端に正座するとお茶を入れてテーブルの上に二つ並べた。

「あなたどうぞ」

賢は沸き上がって来る自分の欲望を見つめ受け入れた。祐子の背中に廻って背後から祐子を抱きしめた。

.....

祐子は美しかった。金色に輝いていた。祐子の肌はピンク色に上気している。賢はまだうっとりしている祐子の身体に浴衣を掛けた。賢はこの美しい祐子を他の誰かに見せたくないと思った。そして、そう思う自分が自己

愛に陥っていることを意識した。しかし、「それもいい」と思った。祐子
があまりにも美しかったので、暫くは祐子の姿を見つめていたかった。

「祐子、暫く俺の腕の中だけにいろ」

祐子は黙って頷いた。祐子は襟元の少しゆるんだ、浴衣に包まれた身体を
賢の腕の中に委ねた。

「このまま抱いていて」

終わった後、男は女性に対する気持ちが薄れるということをよく聞くが、
それは自分には当てはまらないと賢は思った。今の祐子は部屋に入って来
た時よりずっと愛おしく思えた。それより寧ろ、あの野獣のような欲望の
嵐が収まって穏やかな意識が戻り、今は祐子をこの上なく美しく感じてい
た。言葉は要らなかった。賢が祐子の額にくちづけると、祐子の目から一
筋の涙が流れ落ちた。そして、祐子が賢にしがみ付いて来た。

「どうしたらいいの。こうして抱かれていてももっと、もっと強く抱かれ
たいの。わたくしって淫乱かしら」

「俺もそうだけど、今はこうしていよう。食事が済んでから、俺の部屋に
おいで」

ふたりは身繕いを糺すと、上階にあるバイキングレストランに出掛けた。
レストランは大勢の人でごった返していたが、ふたりは初めに窓際の席を
確保した。賢は席に着き、祐子は盆を手にしてフードサービスのコーナー
に向かった。祐子は何度か行き来した。祐子が席を立っている間にウェイ
ターがビールを持って来た。祐子が頼んだようだ。窓からは海が望めた。
海の闇の中に僅かに浮かぶ対岸の光が、海全体が漆黒に落ちるのを救って
いる。祐子はデザートまで用意し終わると賢に向かい合って座った。

「さあて、準備OKよ。乾杯しましょ」

「神の恵みに感謝」

賢が発声して、ふたりはグラスを合わせた。いつも控えめに食事を摂る祐
子がよく食べた。

「とってもお腹が空いたわ」

賢はまわりにいる客をぐるりと見廻した。祐子は誰よりも美しかった。盆
を手食べ物を取りに急ぎ足で廻っている時も、今こうして自分の前に座

って食べ物を頬張っている時も、祐子の姿は可憐だった。

「消えた時、時間が止まったんだな……運動がその瞬間で止まる……
運動方程式を微分すれば、複素空間に移行する時の状態が見えるか……」
賢がビールを口にしながらぼそぼそ呟いた。祐子はちらりと賢を見て、また食べ物に意識を集中した。

「そうだ、初めから時間の経過は無いんだ。ただ、その時現在の状態が固定されるんだ。……だから戻った時は消えた時のままの状態なんだ。……
待てよ、そうすると肉体が生き続けているのはどう説明できるのかな……
そう。状態を維持したまま生きているのかな……いやそれだと、時間経過がある」

「あ、な、た」

「うん、ごめん。つい時空間のことを考えてしまっ」

賢は祐子の顔を見て微笑んだ。

「あとで、少し海岸を散歩しようか？」

「うん」

「だが、待てよ、もしこの世界が写像だとすると、消えることは写像が無くなることで、実相だけになることなんじゃないか？……そうすると、形が固定されたのは分かるとして、戻った時に消えた時のままってことはあり得るか？」

「あなた、まず食事よ。一つの事に意識を集中しなさいって、グ、グ、グ
何とかさんが言っていたでしょ」

「グルジェフ。そうだな、食事だ」

祐子は吹き出してしまった。

ホテルから出て、100メートルほど回り込んでやっと海岸線に出た。ふたりは浴衣に下駄履きだった。賢の腕を抱え込んで歩きながら祐子が言った。

「わたし、あなたは何でもできる人だと思うわ。だから、わたしが赤ちゃんを産んでも大丈夫よね」

賢は「女性はやはり生活を考えるんだ」と思った。薄暗い海岸線は潮風が時々頬を撫でる。

「あなたの子供を宿したら、わたし感動で震えちゃうと思うわ」

「祐子、女性は妊娠すると全身の機能が急に高まるってことを知っているか？」

「へえ、そうなの？」

「まず、運動機能がアップして生命維持力が高まる。身体の中でビタミンCを作れるようにさえなる」

「ふうん、凄いんだ。ビタミンCってレモンに含まれているビタミンでしょ」

「そう、現代の人間は体内でビタミンCを作る能力は無いらしいんだ。大昔はその力があつたようだけどね」

「それができると、どんな能力を得られるの」

「肉体の永遠の若さを保てるのさ。風邪にも強くなるし、肌も綺麗になる。ストレスをものともしなくなるし、免疫力も強くなる」

「わたし、毎日レモンを嚙ろうかしら」

「うん、だけど、おまえこれ以上綺麗になったら、俺いつも我慢できなくなっちゃうぜ。いまでもやっと我慢しているんだから」

「それじゃ、いつも妊娠している・・・何て言っちゃって」

「俺いつも思うんだけど、女性が子供を出産するのは大事業だよな。自分の身体から別の身体を創る訳だから。随分パワーを消耗するんじゃないかと思うんだけど、けどな、10人も子供を産んだ女性が、一人しか産まなかった女性と老化のスピードに差があるようには思えないんだな。きっとビタミンCが関係しているんじゃないかな。それに能力の発現はビタミンCばかりじゃないかもしれないし、人に与えられた力は凄い。驚嘆するよ」

ふたりは砂浜に出た。近くに公営の砂湯が見えた。まだ大勢の人が砂の中に入ったり出て来たりしている。砂は暖かかった。砂の上に腰を降ろすとふたりはつま先を砂の中に差し込んでみた。暖かさが伝わってくる。

「暖かいね」

祐子は賢の肩に寄り掛かった。

「時間よ止まれ、おまえはあまりにも美しい」

「あなたと一緒にならこのまま永遠にこの世界に止まりたいわ」

「たとえ悪魔に身を与えることになってもな、オードリー」

「そうよ、ファウスト。乙女の心を奪った悪いひと」

ふたりは部屋に戻ると、天空露天風呂という屋上の露天風呂に出掛けた。夜空が美しい。「ホテルの光が無ければもっと星が綺麗なのに」と祐子は思った。賢と一緒に入浴できないのを寂しく思ったが、一人だけの開放感は、それとは別に又奥深い夜空に自分を放出できる神秘を感じさせた。賢は空を見上げながら時空間を考えた。

「あの空は永遠の彼方にあるのかな。この世界が写像だとすると、永遠の彼方に写されたものとは何なんだろうか？」

どうも自分は考え過ぎると思った。夜空はただ見ているだけで美しかった。賢は自然に時の過ぎゆくままにを口ずさんだ。廻りに4、5人の先客がいたが少しも気にならなかった。賢はいつものように今日一日を逆に辿ってみた。目の前に現れるのは祐子の姿だけだ。祐子の身体を思い描いたとき、「また浴槽から上がれなくなってしまう」と思った。しかしその感覚を客観視したまま記憶を辿り続けた。

風呂から上がると、今度は祐子が入り口で待っていた。

「夜空がとても神秘的だったわ」

「うん。祐子、海を見たか？」

「ううん、空だけ」

「立ち上がらないと見えないからな。ほとんど闇の中だったけどね」

既に10時を過ぎていた。ふたりは祐子の部屋の前まで来たが、賢が何も言わずにそこを素通りしたので、祐子は小走りで賢に追い付いて賢の手を握った。ふたりが賢の部屋に入ると、既に床が延べられていた。

「あなた、湯ヶ島を思い出すわね」

「湯ヶ島か。おまえが裸になって立っていた。あの時は雷に打たれたような衝撃を受けたよ。本当に頭の中が急に熱くなった」

部屋に入って襖を閉めると、賢は窓のカーテンを引いた。背後から祐子が語りかけた。

「今日のわたしはどう？」

賢が振り向くと、一糸纏わない祐子の姿があった。今度の賢は落ち着いていた。暫くの間、美しい祐子の姿に我を忘れて見惚れていた。今にも賢を吸い込んでしまいそうな、深く澄んだ瞳が妖しく輝いている頭部から、足の爪先まで見事なプロポーションだ。

「わたし、お風呂でよく言われるのよ。男の人が好む身体だって」

賢は祐子の手をとって身体を引き寄せた。

.....

「湯ヶ島と同じように、一体感を高めよう」

ふたりは目を瞑った。さっき見ていた夜空が広がった。そこに一つの小さな光り輝く球が現れた。その球は次第に大きくなり、自分に向かって来る。ふたりとも同じ球を見ていた。自分に向かって来た球が自分の中に入って来るのが見えた。途端に暗い夜空が消え、目を開けていられなほどのまぶしい光が見えた。賢は目の前に裸の祐子の姿が見えた。祐子は目の前に生まれたままの賢の姿が見えた。ふたりともお互いの姿を愛おしく思い、抱きしめた。描かれた映像は現実の映像と同じ形を取った。そこで、目を瞑って頭の中に見える状態と、目を開いて目に映る状態が同じになった。現実のふたりも強く抱き合った。ふたりは30分ほどそのままの状態で動かなかった。祐子は目に自分の姿が映った。自分が自分に向かってるのが分かった。賢も自分の姿が目に映った。そして自分が自分を受け入れているのが分かった。お互いに自分が相手になっていることを意識した。ふたりの思考は止まった。この矛盾的な様相を簡単に受け入れている。ふたりは更に30分ほど恍惚とした状態に浸っていた。やがてふたりの前に現れていた自分たちの映像は消え、木々の繁茂する森が現れた。森の向こうに湖が見えた。湖の向こうは草原だった。その草原の先に海が広がっている。海の向こうに山が聳えている。ふたりは自分たちが空中を飛行して大地を見下ろしていることに気付いた。身体がだんだん上昇し、大地は遠のいて地球の形になった。更に上昇は続いた。気が付くと青い色をした地球と、白く陰の光を映している月とが並んで見える。遙か彼方に太陽が輝いている。それは地上で見るよりずっと小さな光の点だった。ふたりは更に上昇した。太陽系の星々だと分かる惑星が見える。非常に遠くで小さかった。

上昇は更に続く。気が付くと、以前に見たアンドロメダ大星雲のような星雲が見えた。それは眼前に大きくゆったりとその姿を横たえている。上昇は更に続く。幾つかの星雲が見えてきた。星雲の数が増えてきて、それらが幾つかのグループになって寄り集まっているのが分かった。更に上昇は続く。集まった星雲がまるで蜂の巣のように多角形を作って連なっているのが分かった。更に上昇は続いた。もう気が遠くなるような感覚を覚えた。身体がものすごく重たくなってきた。一本の細い銀色の糸がその蜂の巣の中心から伸びている。ふたりはその糸の上をゆっくり動いているのが分かった。細い糸は反対側にある黒く大きな球に繋がっている。ふたりはその糸の上を黒い球に向かってゆっくり動いている。黒い球はものすごく重たいことが分かる。祐子が急に強い力で抱き付いた時、賢の意識が現実に戻った。ふたりはそのまま動かなかった。

「わたし、わたくしの方がいい。あなたに抱かれていたい」

祐子が言った。

「俺たちはまだこの世界に引き付けられているな。時間よ止まれ、おまえはこの上なく美しい」

祐子は首を右左に振って悶えた。両手でシーツの端を握りしめていたが、やがて、賢が絶頂に達するとき祐子は意識を失った。祐子は美しかった。少し口を開いていて、呼吸に合わせて腹部が上下している。軽く閉じた目から涙が流れ落ちていた。賢は唇に軽く口づけした。

「おまえは、本当に美しすぎる」

賢は部屋の灯りを消し、祐子に掛け布団を掛けると、自分もその中に潜り込んだ。祐子の意識は戻らない。賢は祐子の横に自分の身体を横たえ、左手で軽く祐子の右手を握った。

「あなた・・・いつまでも一緒にいてね」

賢は祐子の寝言だと思ったが、いつしか祐子の意識は戻っていた。身体を賢に寄せると賢の胸に顔を埋めた。賢は祐子の肩を軽く抱き締めた。

翌朝賢が目覚ますと、祐子はまだ目覚めていなかった。賢は祐子の肩を軽く抱いた。少し冷たい。祐子が目を開けて

「ううん、だめよ」

と言ったが、その言葉とは裏腹に祐子は身体を起こすと賢の胸の上に覆いかぶさって、賢に口づけした。

「祐子、昨日の重たいものはなんだったのだろうか」

賢は自分と祐子が意識を共有していたと感じていたので、説明せずに聞いた。

「わたしも身体じゃなくて、自分自身が凄く重たいと思ったの。その前はとっても軽かったのよ。凄い勢いで上昇したわ。綺麗だったのよ」

「同じ経験をしていたんだよ。俺には祐子の意識も感覚も分かったよ」

「わたしも、あなたがわたしで、わたしがあなたのような感覚を覚えたわ」

「最後の銀の糸が意味深だな」

「あの銀の糸の端に結びついてた重たいものが今の自分じゃないかしら。だって、星雲の流れが一点に集まったとき、そこが本当の自分の場所だと思ったのよ。そこから銀の糸を伝わって重たい、黒いものの所に降りて来たのよ。今のわたくしたちのように。でも、そこには光が無かったわね」

「祐子、おれは昨日見えた一連の光景が、時々夢に出てくるんだ」

祐子は賢の頭を抱えて自分の胸に引き寄せた。

「暫くこのままでいて」

そう言うと溜息のような長い息を吐いた。

「わたしね……きのう気を失う前に意識を保とうと努力したの……
銀の糸を……」

祐子はふっと息を吐いた。

「小さな光が逆に登っていくのが見えたわ。だけど途中でそのまま何も分からなくなったの……ああ……あなたに手を握られて気が付いたのよ……わたし、なんか大自然の営みの真っ直中にいるようで、涙がこぼれるほど幸せなの。もう、……永遠にこの幸せに浸っていたいわ」

祐子は激しい息使いの中でぼつりぼつりと話した。賢は息苦しくなってきた、祐子の胸から顔を離した。賢は祐子を抱き起こすと、

「さあ、起きよう」

と言った。

祐子は顔を洗ってもまだ、意識が朦朧としていて虚ろだった。

ふたりがホテルを出たのはチェックアウト時間ぎりぎりの9時50分だった。ふたりは今日東京に帰るつもりでいる。指宿枕崎線で一旦鹿児島に出た。荷物を駅のコインロッカーに預け、賢は小バッグ、祐子はハンドバッグを手にして原智明研究会に向かった。身軽になって歩きながら、ハンドバッグを開けると携帯が点滅しているのに気付いた。留守電の伝言メッセージランプだった。

「亜希子さんからだわ。何かしら」

祐子がメッセージを聞いて言った。

「あなたに電話欲しいって言っているわ。昨日の夜に受信していたみたいね」

「そうか。じゃ、電話してみるよ」

そう言うと賢は祐子の電話を受け取った。

「もしもし」

「はい、亜希子でございます。賢さん？身体は大丈夫ですか？わたくし、心配していましたの。お姉様とご一緒だったのですか？」

「うん、同じホテルに泊まったよ」

「わたくし、自分がとても疲れていたの、賢さんのことが心配だったんです。でも、お姉様が一緒なので安心でしたけれど・・・」

賢は次第に亜希子の話すトーンが下がってくるのを感じた。

「休まったかい。亜希子さんは折角鹿児島に来たのに直ぐ戻って残念だったな。そっちに戻ったら研究会の話をしてあげるよ」

「はい。夕べはよく休まりました。研究会のお話、楽しみにしていますわ」
ふたりは研究会の事務所に向かって歩いた。いつものように祐子は賢の左手を抱え込み、賢に凭れかかって歩いた。もう、誰もふたりを切り離すことはできなかった。大通りに沿って少し歩くと、前方から黄色いシャツを着て赤いズボンを履いた老人が歩いて来た。老人が目の前まで接近したとき、ふたりは初めてそれが海の老人であると分かった。目立つ色なのはどうして分からなかったのかと賢は思った。ふたりは頭を下げた。祐子は賢から少し離れて立ち止まり、頭を下げた。

「君たちがふたりでいるところを見るのは久しぶりだ。やはり君たちはよ

く似合う。ところで、一寸お茶でも飲まないか？」

「はい」

賢は緊張した。

「儂に附いて来なさい」

「はい」

ふたりは、踵を返して今来た道に戻って行く老人の後に従った。海の老人は角を右に曲がって横道に逸れて少し行き、更にまた右に折れて路地のような細い道に入ると「海」という名の喫茶店に入った。あまり店内が広くない喫茶店だったが、壁にはいろいろな海の写真が貼ってある。一番奥の壁には縦1メートル、幅2メートルほどもある大きなエーゲ海のプリントが貼ってあった。一人の客もいなかった。老人はA3程の写真の貼ってある壁に面した4人掛けのテーブルに着いた。

「君たちも椅子に座りなさい」

「はい」

賢は少し恐縮しながら先ず祐子を奥に座らせ、その後で自分が座った。

「賢、フェリーでは悪かったな。もう少し簡単な方法を考えたんだけど、君と亜希子とのフェーズが合っていて、パワーが予想以上に強かったんだよ。危なく深い層まで行ってしまうところだった」

ふたりは冷たいものが背中を走ったのを感じ、額には冷や汗が出てきた。

「僕たちはあなたが分かるようにと、麦わら帽を被ってデッキに出たんですが、生憎雨が降っていてあなたの姿を見付けることができませんでした」

「反対側にいたんだよ。君たちの意識が桜島に捕らわれていたから、その方向にいたんだが、君たちが反対側のデッキに姿を現したんで、直ぐに時空のポイントを切り替えようとした途端に君たちは消えてしまったんだな。儂も随分探したけれど、君たちの意識が儂の方を向いていなかったから、どうすることもできなかった。しかし、戻れて何よりだ。行った切りになるのはまだ早いからな」

「わたくしたちのことは見えていたのですか？」

「見えているとも、この世界のものは何でも、いつでも、どこでも見えるよ」

「もしかして、昨日の僕と祐子のことも・・・？」

「勿論。君たちにしてはなかなかいいところまで行っていたな。だけど、最後が今ひとつだったな」

祐子の顔が真っ赤になった。祐子は老人が賢と自分が睦み合っている姿を見ていたのだと思った。しかし、賢は老人の言っている「見える」という意味が、自分たちに見えるものと異なることを理解していたので恥ずかしいとは思わなかった。

「祐子、君は頭の良い娘だ。僕の言葉をよく理解できた。賢は祐子に感謝しなさい。祐子のお陰でこの世界に戻れたのだ。藤代登紀子に救いを求めたのが今回の行動で最も優れている点だ」

祐子が下を向きながら初めて言葉を発した。

「ありがとうございます。わたくしは必死でしたので。藁をもすがる思いでした」

「僕は君たちふたりがこうして一緒にいることがとても嬉しい。今日は一つ大切なことを教えよう。君たちはいつもこの世界とは異なった次元に入っているんだけど、ほとんどの場合そのことに気付いていないんだ。それは光を通して五感でしか世界を観ていないからだ。光には実在的部分と虚在的部分があって、その複合で成り立っている。この虚の部分で現在の科学では見落とされているんだ。だから、いくら追求しても最後のどん詰まりで分からなくなるんだ。不確定性理論だってそうだ。光は複素関数でしか表現できないはずなんだ。虚の部分は意識の領域と同じさ。正確には振動数の影響を受けない部分さ。虚だからね。自分を完全な形で認識する為には、どこまで自己のS/N比を高められるかが鍵だ。つまり、どれだけ心を純粹にできるかが一つのポイントだ。そして、もう一つは自己をどこまでコヒーレントな集中した状態に持ってゆけるかだ。それで、意志の作用の強さが決まる。レーザー光みたいなものさ。一つの領域に光散乱物質と光増幅物質を混ぜ合わせて入れ、その中に光を投げ掛けると、光が閉じ込められるんだ。それがアーカシャの記憶の原理さ。それも、一般の人は光を3次的にしか観ていないから理解できないけどね。複素次元の作用なんだよ。その時は、実際は光は閉じ込められているんじゃないで、

虚空間に入るんだ。この媒質を通して複素空間に作用することができるんだ。確率的にしかアクセスできないんだけどね。アクセス方法が理解できれば、今のスーパーコンピュータの記憶装置としても使えるし、鏡を使うレーザーの作成方法なんかより、楽にコヒーレントな光を導き出せるのさ。これは、同時に精神作用にも適用されるのだ。自分の心をこれと同じ状態に持ってゆけば、思うことが簡単に実現できるようになるはずだ。君たちは地獄はあると思うかね？・・・実はあるんだ。この世界と同じさ。投影されているんだ。君たちの意識に地獄が出来れば、地獄はそのときから存在するのさ。自分が作るのさ。すべて、固定的なものなんて無い。簡単だろう。地獄を作るなよ。ビッグバンの理論もそうさ。宇宙が常に膨張していて、それも150億年前から続いているとのことだけど、信じられるか？これは意識の問題で、虚の次元を理解できていないから、目で見える事象を錯覚して捕らえているんだ。実際は宇宙の果てとは、実次元と、虚次元の境界に相当する訳で、マクロ世界とマイクロ世界が等しくなるところなんだ。宇宙は膨張しているのではなく、極限部分が意識の作用で遠のいて行っているように見えるのだ。つまり、宇宙の果てを覗ようとすればするほど、その果ては遠のいてゆくのだ。素粒子の世界だって同じだ。最小の素粒子が発見されると、さらにその先の素粒子の存在が想定されるようになる。それを追い掛けるのには歴大な設備が必要になる。当たり前のことさ。だって、人間の意識が追い掛けているんだから、どんどん先までゆくのだ。それを実世界だけで知ろうとするから大変なんだ。これも実世界と虚世界の境界での出来事さ。意識の世界さ。人類の総合的な意識の世界さ。宇宙に働いているように見える膨張の力は重力に逆らって働く力なので、気味の悪い力って呼ばれているようだけど、それは当たり前さ。力など働いていないからね。まあ、いろいろ話したけど、今の君たちには、少しは理解できるだろう。実際に祐子がそのことを示してくれたからな。君たちは原智明の話していたことを勉強しているようだが、原智明は今、自分を別の時空間に移している。彼は意図的にそれを行った。しかし、彼は大切なことを見落していた。自分の意志だけで、この世界に戻れると思っていたのだ。今の彼にはそれは不可能だ。そこには外側からの作用も無くてはなら

ない。個は個であると同時に全体でもあるんだ。自分以外の力が働かなくてはならないのだよ。分かるかな。原智明の話した言葉をよく研究してみるといい。しかし、これだけは覚えておきなさい。いくら研究しても、学んでも、究極の存在には到達できない。方法はただ一つ。内側に向かい、自分自身の中心に到達することだ・・・今日は一寸喋り過ぎたかな。まあ、まだ君たちには大半は理解できないだろうから、問題ないと思うがな」賢と祐子是一言も漏らさず聞き取ろうと、全神経を集中していた。しかし、祐子には老人の話している内容はほとんど理解できなかった。しかし、自分のやったことが正しかったようだと思って嬉しく感じた。賢は完全に理解できたわけではなかったが、自分が普段感じていることを説明しているらしいと思った。海の老人の言うように言葉の上の理解だけでは、世界を認識できないと感じた。まだ、自分の体験した別の時空間への移行ということ自体が理解できていなかった。祐子はいつも疑問に思っていることを聞こうと思った。

「あの、失礼ですが、わたくしたちはあなたのことをどのようにお呼びしたらよろしいのでしょうか？」

「儂はムクウと言う名前だ。しかしそう呼ぶ者はほとんどいない。君たちも知っているように、海の老人とか親父さんとか呼ばれているよ」

賢は、祐子がいろいろ訪ねてくれればいいと思っていた。祐子は続けて尋ねた。

「これからはムクウさんと呼んでもいいですか？」

「いいとも」

「でも、どうしていつもわたくしたちが困っているときに、現れてくれるのですか？」

「儂はな、いつもこの世界の出入り口付近にいるんだよ。君たちが儂のいる所に現れるんだよ。君たちが調査している失踪事件は、みんなこの出入り口付近で起きているんだ。日本だと、全部で13カ所あるんだがな。君たちは既にその内の5カ所を調べているんだ。だが、それも変化してゆくんだ。君たちはまだ瞑想の本当の力を知らないが、瞑想で自分の中心が見つけれられるんだよ。・・・いやはや、祐子にはかなわないな。本当はまだ

ここまで話してはいけないんだがな。祐子の意識があまりに純粹だから、つい話してしまう。そろそろ失礼するよ」

そう言うとムクウは席を立った。ふたりは突然に席を立たれて狼狽したが、直ぐに後を追って喫茶店を出た。支払いをしようとするウエイトレスが「既にお支払いいただいています」と言った。ふたりは急いでムクウの後を追って外に出たが、既にそこにはムクウの姿は無かった。

「いろいろなことを伺ったな。一寸整理しないと混乱してしまう。祐子、ファミレスかどこか食事のできるところでまとめをしよう」

ふたりは通りに面したファミレスに入った。祐子はサンドイッチを二人前頼んだ。賢は今ムクウから聞いた言葉をノートに纏めた。祐子の携帯電話が鳴った。数馬からだった。

「祐子、賢は近くにいるか？」

「目の前にいるわよ」

「おれ、今日の夕方鹿児島に着くんだ、これから羽田を発つんだけど、賢と代わってくれないか」

「分かったわ」

「数馬君が今日鹿児島に来るそうよ」

祐子は携帯電話を賢に渡した。

「もしもし、数馬か。こっちに来るんだって？」

「うん、この間の薩摩電子工業と仕様の凍結の会議を持たなければならなくなつたんだ。夕方会えるかな？」

「俺たち、今日の夕方の便で東京に帰るんだ」

「そうか・・・」

数馬の声は残念そうに賢の耳に響いた。

「何か急用でもあるのか？」

「うん。一寸相談に乗ってもらいたいことがあってな」

「そうか、それじゃ祐子だけ返ってもらうか」

祐子がそれを聞いていて横から言った。

「駄目よ、わたくしも残る」

賢は少し微笑んで、

「もしもし、分かった。それじゃ、今日の夕方3人で一緒に食事でもしながら話そうか？」

「よし。ところでどこに泊まっていたんだ」

「指宿だよ。一寸距離があるから霧島の方にしよう。その方が空港に近いからな」

「分かった。俺はビジネスホテルに泊まるつもりだったから、賢に任せるよ。ホテルの予約頼むな」

「分かった。それじゃ空港まで迎えに行くよ」

昼食を摂りながらふたりは橘の話題に花を咲かせた。祐子は橘が高校の生物の教諭であること。ハンサムなのにまだ独身で、DNAについて特に興味を持っている点を賢に説明した。人間の心の状態とゲノムの不思議な挙動との関係について橘が研究をしていると言った。賢は祐子が橘のことを好意的に思っていることを快く感じた。橘とゆっくり話をしたいと思った。昼食を済ますとふたりは原智明研究会に顔を出した。研究会には橘と所長の馬場がいた。所長は賢の説明した失踪からの帰還に至るプロセスに非常に興味を持っていて、何とかして原智明を呼び戻そうと考えているようだった。ふたりが事務所に入ると、馬場が

「祐子さん、今日も綺麗だね」

と世辞を言った。しかし、祐子にはその言葉が濁って聞こえた。祐子はそう思っただけでいいと自省して

「所長さん、お世辞もおっしゃるんですね」

と応じた。橘が厨房から麦茶を2杯持って来てセンターテーブルに置き、ふたりの方を見ずに言った。

「こちらにはいつまでいらっしゃるのですか？」

「はい、明日帰る予定です」

橘は祐子の声に心なしか寂しそうな目をした。賢が

「橘さん、DNAのことを研究されているとのことですが、僕たちにも何かお話しいただけないでしょうか」

と言うと、橘は遠慮がちに応えた。

「私は、研究とは言っても机上の研究で、あまり高性能な顕微鏡を持って

いないので詳細の観察はできていないのです。私の詭弁になるかも知れませんが。それでもよろしければお話しさせていただきますが」

「是非お願いします」

「それでは、少し原智明さんの語録を引き合いに出しながら話してみたいと思います」

橘は棚から原智明語録を取り出し、センターテーブルの上に開いた。項目32を示しながら、祐子の顔を見て言った。

「祐子さん、貴女が初めてこちらにいらしたとき、このページを説明したと思いますが覚えていますか？」

「はい、意味はよく分からなかったのですが、DNAには世界を作る力があるということは覚えてます」

タイトルは「DNAの意味」となっていて、説明書きに次のように書かれている。

「よく、DNAと言う形態を思いついたものだ。DNAは生物の全体を定義している。設計で言えば要件定義書だ。それぞれの項目が人間の機能に対応している。その機能を「あり」「なし」で定義している。人間はよく分からないから、ほとんどの仕様の項目に「なし」のマークを付けている。潜在意識がやっている。分からないことは「なし」にするしかない。「あり」となっているのは全体の3パーセントほどだ。肉体の機能は人間の全体の3パーセントに過ぎない。残りの97パーセントはほとんど、現在の人間が忘れてしまった内容だ。10個ばかり例をあげてみると、・・・・・・これらは一つのスイッチで切り替えられる訳ではない。いくつかのスイッチの組み合わせで切り替える。しかし、最近、その切り替えを行える人が増えてきている。DNAは光をコントロールできる。光がこの世界を作り上げている。つまり、DNAを制御することで、世界の構造を変えることができる」

橘は説明文の最後の部分を指さして言った。

「この部分がポイントなんです。祐子さんが今おっしゃったDNAには世界を作る力があるという点なんです。わたくしは原智明語録に出会ってから、特にこの部分のことを研究しているんですよ。DNAは光で自分の

形を模写できる力を持っているんです。これは実験で確かめられています。そうすると、どうしたらDNAの情報伝達のスイッチを切り替えられるかということが重要になります。いろいろな学者がこれを研究していて、最近の報告では「慈悲の心」がDNAに最も強く作用すると言われているのです」

「慈悲の心って意識的に作り出せるようなものじゃないと思うわ」

「それが問題なんですね。心が優しく愛情に満ちた人が、大勢の人を救う為に自分の身を犠牲にする—そんなとき慈悲の心があるって言われるんですよね」

賢が言った。

「それは証明されているのでしょうか？」

「ある程度は実証されているようです。それに旧約聖書のイザヤ書にもそんなことが書かれているっていうから、一寸不思議な気がします。勿論DNAのことなんかは書いてないんでしょうがね」

「わたし、慈悲の心は愛する心と似ていると思います。愛おしくなってくると、「近くにいたい」「苦しんでいたら助けたい」、その人が喜ぶと自分も自然に浮き浮きしてくる。それが人に対してだけでなく、動物に対しても、草木に対しても、気持ちがエスカレートすると、空の青さに涙ぐみ、水の流れに身体が打ち震えるほど感動したりするでしょう。こういう感情と慈悲の心って元は同じなんじゃないかって感じるの。もし、そうだとすると、誰でもみんなそんな感情は持っているように思うわ」

馬場が言った。

「誰でも慈悲の心を抱く素地はあるけど、実際には抱けないんだな。祐子さんは心が純粹なんでしょう。だから誰でも同じように人を愛せると思っているんじゃないかな」

「でも、わたし、誰にも愛、優しさ、慈しみの心・・・そういう感情があると思うわ。どんな悪い人にも」

賢が言った。

「僕もそう思う。しかし、それを表わせるかどうかは、その人の特質にかかっていると思うな」

橘が言った。

「話が横道に逸れたけど、DNAをコントロールできるのは人間だけだと思うんです。だから、人間は世界を変えられる。多くの人が集まって意識を集中すると何かを達成できるように言われているけど、僕は一寸違った意見なんです。パワーはかけ算で作用するんだと思います。だから意識が1のレベルの人が何千人、何万人集まっても、そのパワーは1なんじゃないかと。もしすべての人が1より小さい意識、例えば0.99の意識しか持っていないとすると、大勢集まるとその意識は消えていってしまうのではないかと思うんです。しかし、もし1より大きい、例えば1.01の強さを持った意識なら大勢集まると巨大な力になってくるような気がします。大勢集まってことを起こす時は、先ず一人一人の意識を純粹にして、それを高める必要があると思うのです。それを拡張して考えると、たった一人でも高い意識を継続的に繰り返し持ち続けると、凄く大きな力になって来るように思うのです」

「橘さん、あなたがおっしゃると、意識の力で何かを達成できるということが、具体性を帯びて聞こえるわ」

賢も同意した。

「本当に分かりやすい説明ですね。僕も意識のエネルギーは運動エネルギーのような通常のエネルギーとは異なる力を持っているように思います。意志のエネルギーは強く、しかも持続させると自己循環によって、共振を起こすような形になるような気がします」

「慈悲の心だけでなく、怒りのようなマイナスの力も同じように持続的に働くと、凄い破壊力を発揮するんじゃないですか？」

「そう、わたくしもそう思う。だから、原智明さんの語録の31番目以降は公開していないんだよ。これを知る人間が悪い方に使うと破壊兵器が簡単に出来てしまうからな」

馬場が言った。その言葉を聞いて賢が尋ねた。

「この語録をコピーさせていただく訳にいきませんか？」

馬場が言った。

「申し訳ないけど、それはできません。原智明さんは自分の言葉が悪い方

に転用されることを意識していなかったようですが、一旦わたし達があることに気付いた限り、これは極秘にしておく必要があります。内観さんや崎野さんにこれをお見せするのは、あなた方が安全だからです。でもこの情報があなた方の意志に反して、どんな形であなた方の手を離れて他人の手に渡るか分かりませんからね」

祐子は賢に向かって言った。

「賢さん、諦めましょう」

「うん、仕方ないな。また、何かの機会に拝見できるだろう」

橘が

「多分ね」

と言った。馬場は少し微笑んだ。賢は馬場の微笑みが少し気になったが、敢えて意識しないようにした。賢は既に目にした語録の内容は全て記憶してしまっていた。馬場は書棚から原智明の写真アルバムを取り出して賢に見せた。賢は原智明が小柄で目の大きい、少年のような男性であることに少し驚いた。橘からアルバムを受け取ると、祐子と並んで1ページずつ開いてみた。祐子は初めてここを訪れた時に馬場に2ページ目まで見せてもらった。3ページ目の宴会の写真を見た時、馬場が祐子の腿に手を載せたのを思い出して馬場の顔を見た。馬場は意識してか、アルバムから目を離して窓の方を見ていた。賢はそのページにある1枚の写真に目が留まった。原智明が独楽を回している写真だった。真剣な眼差しで独楽の回っているところを見つめている。

「独楽に興味があったのかな？それとも、もっと深い意味を持っているのかな」

独り言のように賢が言うと、馬場がそれに応えるように言った。

「原智明さんは凄い計算能力を持っていて、動いているものは何でも即座にスピードを計算できたようだよ。飛行機の飛んでいる所を見て、「あの飛行機は鹿児島空港から何時何分頃に離陸した」何てことも言い当てたらしいよ。ああいう天才を失うのは国家的損失、いや人類の損失だ。なんとか探し出さなくては」

馬場は呟くように言ってアルバムを閉じた後、ふたりに失踪事件調査ノー

トを見せた。ふたりが研究会を出たのは3時頃だった。橘が祐子の方を向いて言った。

「もう、戻られてしまうんですか」

祐子は軽く会釈を返した。馬場は賢に向かって

「是非また来てください」

と言った。ふたりは礼を言って分かれた。夕刻ふたりは鹿児島空港で数馬を出迎えた。羽田からの便が到着すると、間もなく数馬が出口に現れた。紺のスーツに黄調のネクタイを締め、小型のトラベルバッグを手にしている。

「数馬君！ここよ！」

祐子が手を振った。

「やあ、無事帰還したか。良かったな」

「うん、世話を掛けたな」

「久し振りだな。何か、何ヶ月も会わなかったような気がするぞ」

「数馬君元気そうね」

「そう、元気は俺の専売特許だからな」

「それにしても、この間も俺を捜しに鹿児島に来てくれたんだろう。忙しい時に本当に悪かったな」

「ばか言え、当たり前じゃないか。ところで、無理に滞在を延期させたように済まないな」

「なに、丁度お前に会いたいと思っていたところだ。とりあえず宿にチェックインしてから外に出るか？」

「そうだな。その方が落ち着くな」

「そうね」

「お前達、相部屋か？」

「おい、よせよ」

「いや、おれに遠慮することはないぜ」

祐子は顔が熱くなるのを感じ、きっと赤らんでいる顔を数馬に見られないように、賢の陰になるようにして歩いた。

「いや、3部屋予約した」

「そうか」

賢はレンタカーを借りた。幸いなことに、賢は免許証やクレジットカードを小バッグに入れていたので遺留品として東京に送られるのを免れた。3人は霧島温泉の霧島山ホテルに着いた。山裾に立つ大きな旅館だった。駐車案内の老人が

「泊ると？」

と聞いた。賢が

「ええ」

と答えると、宿泊用の駐車エリアに案内された。車を駐車すると3人はそこから少し歩いてホテルのエントランスを入った。直ぐにベルボーイが寄って来て3人の荷物をカートに積んでフロントに運んだ。祐子が3部屋予約していた。3人はチェックインするとそれぞれの部屋に分かれた。部屋はバラバラに与えられた。設備が整っているので外に出ずにホテルの中のレストランで話をするようになった。3人はとりあえず風呂を浴びてからということにして、入浴後にフロントで待ち合わせることにした。男性2人は浴衣で現れたが、祐子は別のブラウスに着替えて顕れた。

「なんだ、祐子も浴衣で来るかと思った」

「お生憎様。お酒飲むんでしょ」

「それはそうだが、一度祐子の浴衣姿を拝みたいものだと思ってね」

数馬は少し冗談ぽく言った。賢は笑っていた。3人はホテル内にあるレセプションコーナーに向かった。そこには5席ほどの丸テーブルがある。壁際にカウンターが設けてあり、ビバレッジの他にビールやカクテルなどの軽いアルコール類もサービスしていた。3人は一番奥のコーナーのテーブルに着いてビールを頼んだ。ボーイが20センチほどあるストレートなタンブラーに注いだビールを運んで来た。数馬が乾杯の音頭を取った。

「亜希子さんは居ないけど、賢と亜希子さんの無事の帰還にカンパイ」
賢と祐子も「カンパイ」と大きな声で唱和した。レセプションコーナーには他に客はいなかったが、ロビー脇の三組の応接セットにはチェックインをしている仲間を待つ宿泊客が居て、荷物を周囲に散乱させてざわついていた。乾杯の発声にその宿泊客が一斉に賢達に視線を向けた。

「いや、恥ずかしい。わたし浴衣じゃなくて良かったわ」

祐子は浮き浮きした気分に乗って興奮気味に発声したことを悔やみながら、ビールをテーブルに置くと目を伏せて言った。数馬と賢はそんなことは気にも留めずに一気にビールを飲み干した。賢が空のタンブラーをテーブルに置くと、

「それでは話を聞こうか」

と言った。

「うむ。これはまだ公開されていないから、ここだけの話として聞いてくれよ。実は今度、政府主導で巨大なプロジェクトが立ち上がることになりそうなんだ。新宿なんかにあるVEAS館、あれを巨大化したような施設を作る計画なんだ。それも、全国、各都道府県に1、2棟の建設を計画しているんだ。こいつが凄いいんだぜ。関係者は仮称で九次元園と呼んでいるんだが、ホログラフィを駆使して実体験できる仮想生活空間を作ろうという訳さ。予算が半端じゃないんだ。いくらだと思う？15兆円だぜ。それも、建物とシステムの設備だけでの話さ。周辺タウン開発まで入れると30兆円規模だと見込まれているんだ。これは事業規模が大きいから、公開入札で、入札者や入札の途中経過から結果までを公示すると財務省は言っているらしい。その目的が問題さ。次世代教育と人材育成という名目なんだ。だがな、鉄屋のような何か別の組織が絡んでいるような話も聞く」

「それで、どんな形で進めるんだ」

「トップに政府直轄の推進本部を設けて、その下にインフラプロジェクト、システムプロジェクト、財務プロジェクト、リソースプロジェクトの4つのプロジェクトが設けられるんだ。それぞれのプロジェクトが近々公開入札を始める予定とのことで、実はその中のインフラプロジェクトに藤代肇さんの財閥東領グループ傘下の会社が名乗りを上げている。俺たちの会社もシステムプロジェクトに応札する予定だが、外部との連携を含めて組織化ができるかどうかのポイントになる。祐子、お前の叔父さんの会社もシステムプロジェクトに名乗りを上げたようだぞ」

「叔父さんの会社はわたしには関係ないわ」

「相談というのは、その応札体制についてのことなんだ。俺たちの会社は

東領グループ傘下の会社に比べれば、まだ雛だ。入札企業のリストに残るためには、巨大企業の後ろ盾が必要なんだ。ところが知っての通り、うちの会社はニューテクノロジーを生業（なりわい）にしている会社だから、実績もあまり無い。勿論会社の規模も小さい。そこで相談だが、藤代肇さんの会社に後ろ盾を頼めないかということだ。俺が直接頼むより、賢や祐子が頼んでくれたら案外スムーズにことが運ぶんじゃないかと思ってな。この仕事を取ると、これから10年間ほどは集中的に最先端の仕事に取り組めるからな」

「そうか、それはいつ頃までに必要なんだ」

「来月中には入札企業が決定するらしい。しかしまあ、役人の進めることだから、最悪今年一杯くらい掛かるかも知れないけどな。いずれにしても、俺たちの会社を認識させる意味でもできるだけ早期にノミネートすることが大切なんだ」

「俺はシステム関連分野に疎いから、うまく説明できるかどうか自信無いな」

「その話、もっと詳しく聞かせて。わたし、お父様に相談してみるわ」
それからおよそ1時間、数馬は自分の会社の事業内容や、最も得意とする分野などを分かり易く噛み砕いて説明した。

「わたしは、東京に戻れば直ぐに父に会えるわ。でも賢くんは無理よね」

「俺もチャンスがあれば必ず話を持ち掛けてみるけど、藤代肇さんはもし数馬の会社が有望だと思えば吸収合併に動くかも知れないぞ。それでもいいのか？」

「その方が当社としてもやり易い。協力会社を寄せ集めるのもやり易くなるし」

「よし、それじゃ、後は祐子と俺の回答待ちだな。・・・よし、この話はここまでにしよう。今度は俺が自分達のことも含めて、失踪事件の調査経過を話すよ」

賢はこれまでの経過を話した。

「まあ、今回はそういうことで、本当に祐子に助けてもらった。どうやら失踪というのはそう単純じゃなさそうだ。違う時空間に移動してしまうこ

とはほぼ間違いないが、その時空間は一概にここだというような処じゃないようなんだ。さっきも言った海の老人の話じゃ、失踪する時の条件で移動する時空間の深さが異なるようなのだな。あの方は俺と亜希子さんがまだそれほど深いところに落ちなかったから戻って来れたって言っていた」

「そうね、わたしもその話を聞いた時ぞっとしたわ」

数馬が言った。

「つまりは、先ず時空間を超えられる通路に出る。これは、賢達の場合は自動的に行われた訳だ。それから移動しようとする方向に向けて意識を集中する。その時同時に自分を引っ張ってくれる対象が引き合うように意識を集中する。・・・ということか」

「うん。そういうことになるな」

賢と祐子は原智明語録のことには触れなかった。数馬は原の消息について聞いた。

「ところで失踪した原智明さんだが、その後、何か分かったか？」

「いや、彼の天才ぶりはよく分かったが、どうして失踪したかは分からずじまいだ。海の老人の話では、彼は意図的に失踪したんじゃないかということだ。しかし、戻ることを考えていなかったんじゃないかって。あの方がおっしゃるには、原智明さんは、戻る為には誰かが引っ張ってくれることが必要だということに気付いていなかったんじゃないかって」

「原智明さんの研究会に行ってみたか？」

「うん、語録や写真を見せてもらったよ」

「そうか、彼は変わってたらしいからな。何か面白い写真があったか？」

数馬は語録より写真に興味を示した。

「うん、原さんは独楽に興味があったようだな。じっと見つめている写真があった。彼は童顔なんだよ。俺はてっきり学者っぽい顔をしていると思っただけだな。まだ子供っぽさが抜け切れていない感じだ」

「案外天才なんていうのはそんなものかも知れないぜ。よく、「子供の頃は天才で、20歳過ぎれば只の人」って言うだろう。大人の年になっても天才性を維持している奴は、大人になっても姿形は子供のままかもしれないぜ。はっはっはっ」

3人はそのまま夕食の用意されている広間に移動した。既に食卓の準備も出来ていた。3人は改めてビールで乾杯をしてから夕食を摂った。夕食を済ますと、3人は朝8時にチェックアウトする約束をしてそれぞれの部屋に戻った。賢が部屋に入ると既に床が延べてあった。賢は座卓にメモ帳を広げ、海の老人ムクウの話した言葉を見直した。正しく写し取ったかどうか確かめるために、記憶を辿ってムクウが話している時の姿を思い浮かべながら1文字ずつ確認していった。やはりニュアンスをうまく捕らえていない箇所もあった。それらを書き直してから、窓際に立ち外を覗き見た。指宿の吸い込まれるような黒い海とは違い、薄暗闇の中に山肌が迫っていて、逆に黒いものが迫って来るような印象を受ける。ここは以前、噴火して地域一帯が騒然とした新燃岳からそれほど遠くない。今はそれも収まっていて、特に変わったものは見えなかった。賢はカーテンを締めてから、祐子に電話をしようとした。そのとき電話が鳴った。祐子からだった。

「祐子よ、今から行くわね」

囁くように言った。1分もしないうちに祐子が頭れた。祐子は浴衣に着替えていて、右手に3冊のノート、左手に部屋の鍵とバスタオルを持っていた。賢は急いで祐子を部屋に入るとドアの鍵を掛けた。祐子が上がり框を上がり、部屋に入ると賢は後ろ手で襖を閉めて背後から祐子を抱き締めて、首筋に口づけた。祐子は顎をあげて反応した。

「あなた、・・・ノートを持って来たわ。3冊とも」

賢は祐子がノートを持った右手を挙げたのを無視して、祐子の脇の下に手を回した。祐子が恥ずかしそうに教えてくれた方法だ。祐子は持っているものをすべて落とした。

「焦らないで、あなた」

賢は沸き起こる感情に衝かれていたが自分を押さえようとは思わなかった。30分ほどふたりは無言で抱擁し合った。賢の情熱の嵐の中で祐子は陶酔の淵に落ちた。

やがてふたりは脱ぎ捨てた浴衣を身につけて身繕いを糺すと、風呂に出掛けた。11時半を回っていた。階下で風呂から上がって部屋に戻る途中の数馬に出会った。

「おっ、ふたり揃ってこれから風呂にお出掛けか？」

祐子は赤面したが賢は素知らぬ顔で応えた。

「うん。明日は7時には食事を摂らなくちゃな。それじゃお休み」

「お休みなさい」

祐子も調子を合わせた。肩透かしを食って、数馬も「お休み」と言って風呂に向かうふたりの後ろ姿を見送った。祐子は脱衣所に誰もいないのを確かめると、ほっとして浴衣を脱いだ。全身を鏡に映してみると、乳房に赤い跡が残っている。賢の作った跡だ。首の付け根にも1カ所赤い印が残っていた。祐子は湯タオルで前を隠しながら浴室に入った。夕方は大勢の人たちが入浴していたが、今は一人も居ない。身体を流してから湯船に浸かった。大きなガラス窓からは闇の中に木々の梢が見える。窓ガラスを凝視すると湯煙の中に美しい女性の姿が映っていた。女性はしなやかな肩と豊かな胸を持っていて、まるで全身に喜びを湛えているかのようだった。まだ夢心地の意識に気を注ぐと、それが自分であることを知って祐子は微笑んだ。祐子は賢の力強い肉体を思い出した。賢は祐子の裸を見ただけで全身に血が充満して来るようだった。そんな賢の姿を見ると自分も血が煮えたぎってくるのを覚えた。賢の唇や指が自分の身体を奏でている時、快感の中で喜悅の声を発しながら祐子はいつも感覚とは別に意識が冴え渡るのを覚えた。意識は賢の存在に向けられているようだった。賢に抱かれているという意識が、自分を至福の海に漂わせるのだった。祐子は賢を思い続けている間に、頭がぼーっとしてきて縁に手を着いて湯船から上がろうとした。目の前が暗くなった。のぼせたようだった。洗面台の前に腰掛けると鏡に映った自分の姿を眺めた。赤くなっている部分が嬉しかった。そこを軽く撫でてみた。また喜びの感覚が戻ってきた。髪を洗い全身を流してから、別の湯船に浸かってみた。少し温めの湯船だった。その時、男性の低い声が聞こえた。賢の声ではない。何かぼそぼそと言ったようだ。自分のほかに誰も居ないはずの浴室に聞こえて来た男の声に、祐子は背筋が冷たくなるような恐怖心を覚えた。入り口のドアが開いた。ホテルの男性のようだった。年はまだ若い。祐子は

「まだ、入っています」

と大きな声で言った。男性は、祐子の方をじっと見て言った。

「お客さんですか、失礼しました。この湯はこれから男性の湯に替わるんです。時間で交代するようになっていまして」

「直ぐに上がりますから、少し待ってください」

「分かりました」

そう言うと男性は入り口の扉を閉めて出て行った。祐子は急いで湯船から出ると、湯タオルで身体を拭ってから前を隠して脱衣所に出た。さっきの男性が出口の角の方に立って祐子の方を見ている。祐子は急いで浴衣を入れた籠の棚に行き、胸を隠すようにバスタオルを巻き付けた。男性はまだ祐子の姿を見つめている。祐子は湯タオルで髪を拭くと、下着を身に着け浴衣で肌を隠した。そして急いでタオルを畳むと出口に向かった。

「急がせてしまって、済みません」

「失礼しました」

祐子はスリッパを引っ掛け、駆け出すように暖簾を掻き分けて外に出た。賢が待っていた。

「随分ゆっくりだったな」

「あら、そんなに？」

「うん、もう15分くらい待っているよ」

祐子は賢の耳元に顔を寄せて、

「今夜は貴方のお部屋で寝たいわ」

と言った。

「数馬も泊まっているんだぞ」

「いま、男の人が入ってきて怖かったのよ。一人にしないで」

「分かった」

ふたりは賢の部屋に戻った。寝支度を調べると、ふたりは一つの床に潜り込んだ。祐子は微笑を浮かべた顔を賢の方に向けた。賢は祐子の額に軽く口づけてから目を閉じた。祐子は右手で賢の左手を探して握った。ふたりはそのまま眠りに落ちた。賢が目を覚ますと、祐子は既に起きて身繕いを糺していた。

「わたし部屋に戻るわね」

祐子は急いで出て行った。荷物を整理して身支度を整え、賢が昨日の大広間に行くと数馬が既に席に着いていた。

「賢、なんだ祐子と一緒にじゃなかったのか？」

それには答えずに賢は

「早いじゃないか、今日は直接薩摩電子工業に行くのか？」

と聞いた。

「ああ、会議の前に少し顔を出したい部署があつてな」

そこに祐子が来た。

「おはよう」

ふたりは同時に

「おはよう」

と返した。祐子は賢の顔を見て微笑んだ。「朝まで一緒にいたのに、一寸白々しいかしら」と思った。仲居がやって来て食事の用意を調べてくれた。

3人は用意された朝食を残らず平らげた。

「賢くん、数馬君を送って行ったらどうかしら」

「ありがとう。だけど薩摩電子工業の人が迎えに来てくれることになってるんだ。なんでも、ここからそんなに遠くない所に住んでいるらしい」

「待遇がいいな。薩摩電子工業にとっては大切なパートナーだからか」

「そんなことでもないようだが、今度の契約でいつも一緒に仕事をしてきたからな」

「一晩付き合わせちゃったけど、今日はどうするんだ？」

「祐子、どうしようか？フライトは夕方だったよな」

「賢くん、折角霧島まで来たから、高千穂峰に行ってみようか？」

「そうだな。天孫降臨の地を訪れるのもいいな」

「宮崎県にもあるんだろう。どっちが本当の場所かな」

「本居宣長は両方だって言っていたようね」

「祐子、お前ホントにそういうことに詳しいな」

数馬が言った。

「鹿児島県のこと事前に調べておいたのよ」

ふたりの男性は感心した。チェックアウトをして外に出ると、既に数馬の

迎えの車が来ていた。40歳くらいの中堅社員といった感じだった。数馬はその車に乗る前にふたりを振り向き、

「あの件よろしく頼むよ」

と言った。数馬を乗せた車が立ち去ると、賢と祐子はレンタカーの所に行き荷物を積んだ。賢は先ず助手席の側に廻って扉を開き、手を取って祐子に乗せてから扉を閉めた。賢が運転席に戻って乗り込むと、祐子が

「ありがとう」

と言って微笑んだ。

「あなた、いつまでもこんなに優しくしてくれるかしら」

「もう大分安定してきたから、多分変わらないだろう」

賢は本心からそう思っている。祐子は言葉で表現できない美しさで輝いている。賢は祐子の身体の表面のことは隅から隅まで知っている。左の乳首の直ぐ下に、小さなほくろがあることも知っている。左右の乳房の形がどの程度違っているかまで知っていた。頭を抱きしめて、髪に口づけした時、旋毛（つむじ）が左巻きなことまでは確認した。流石に頭髮に隠れた頭皮のことはよく分からなかったが、機会があったら見てみたいとも思っている。自分は医師ではないが、祐子の身体が輝くほど美しく、肌が透けるように透明感を持って見えるのはきっと血液が澄んでいる上に、毛細血管の均整がとれて、皮膚に張り巡らされているからに違いないと思った。祐子の身体にはほとんど体臭が無かったが、賢は自分の腕に抱かれている祐子の肌から、淡い甘露のような香りがするのを感じたことが何度かある。暑い日差しの中で祐子がハンカチを出してそっと汗を拭くと、「祐子の汗を含んだハンカチは、きっとムラ・ナスレディン話に出てくる、お姫様が川に流していた饅頭の香りがするに違いない」などと、妙なことを考えたりした。祐子の身体に触れ、抱擁し、果てた後も祐子への愛おしさが少しも変化しないことに、自分の愛が肉欲では無いことを確信し始めている。それが安定して来たということの意味だった。

「わたしね、もしあなたが戻らなかったら、後を追うことに決めていたって言ったでしょ。ほんとはね、どうやって後を追っていいのか分からなかったのよ。ただ、命を捨てるだけでいいのかどうかも分からなかったの

よ。だから、あなたの消息が分からない時、もう、頭が可笑しくなりそうだったの」

ふたりは出掛ける前にホテルの売店で握り飯とペットボトルの茶を買ってきた。高千穂峰に登るつもりだった。祐子は朝食後、綿のパンツに履き替えて出て来た。

「祐子、お前の能力はたいしたものだよ。よく冷静さを保って、これほどいろいろなことを判断できたと感心するよ。藤代肇さんや登紀子さんがお前を養女にしたいと思った理由が分かる。でも、俺たちこれからどうやって会おうか？」

「大丈夫よ。それはなんとかなるわ。でもあなた、わたしと一緒に住むって言ったでしょ。ねえ、ホントにそのつもり？」

「うん。勿論約束した通りさ。だけど、以前と状況が違うからどうしようかと思ってな」

山道を運転しながらの会話は、心弾むものがあった。道の両脇はふたりを祝福するかのように木々が生き生きと茂り、話す言葉にも色艶が出てきているように思える。しかし浮き浮きばかりはしてられない。対向車に出会った時はひやっとする場面もあり、話す言葉が少し途切れたりした。賢はできるだけ視線を道路に固定して運転に優先権を与えながら、話を続けた。

「俺たちが一緒に住むためには、結婚というプロセスを経ないといけないような気がするんだ。そうなると、ふたりの間に生活という避け難い要素が入り込んで来て、純粋さを維持することが難しくなるんじゃないかと思うんだ。本当はお前と一緒にいるだけにしたいんだ。今の俺は少し動物的な感情に引き摺られ過ぎている。もっと冷静にお前に接することができないと、この生の目的を達成できないような気がする。こうしていてもお前を押し倒したい衝動が波のように寄せて来ては引いて行く」

祐子は右手で賢の首筋に触れた。

「お前の裸が目の前にちらつくんだ。食欲さと執着心だ」

「あなた、わたしはあなたと一緒に居られればどんな形でもいいわ。激しいあなたも、静かなあなたも、みんな好き。あなたが近くに居てくれるだ

けでうれしいの。抱かれている時も、こうして話をしているときも幸せよ」
「3ヶ月おまえと一緒に寝ると、多分、今のようにならいつも性的にお前に引かれることは無くなると思う。その時、おまえの存在としての美しさが俺の面前に表れる。お前も一緒じゃないかな。時の経過と共に俺の肉体的な魅力は失せるだろう。美しさは姿形ばかりではなく、思いや感情、意識や意志全てだ。今は目に見えない部分が性のエネルギーの陰に隠れてしまっていてよく見えない。おれは性的なものを取り除いても、お前の存在に強く惹かれていることを知っている。だけど、生活は別だ。これを越えることはかなり難しい。パターン化した習慣は障害になる場合すらある」

「でも、わたしはあなたの子供を産むわ」

「えっ、もう中にいるのか？」

「ううん、まだよ。昨日のことは分からないけど」

「昨日に限って言えば、子供を儲けることを控えようという意識を維持していたから、多分誕生のプロセスはまだ始まっていないと思うよ」

高千穂河原の駐車場に車を駐車すると、賢は握り飯と飲み物の入った袋を手にして車を降りた。祐子はハンドバッグに紐を付け、車から降りるとそれを襷掛けした。案内板に「入山の前にビジターセンターで駐車料金を払い、入山登録してください」と書かれていたので、先ず登録を済ませてから標識に沿って歩くことに決めた。祐子が簡単な地図を用意していた。

「こんな軽装で登れるのかしら」

不安そうな顔をして賢に聞いた。廻りには数組の本格的な登山スタイルのグループが登山靴の紐を締めたり、リュックの中を確認したりしている。2人は軽装にスニーカーという姿だ。

「大丈夫さ。ゆっくり登ればなんとかなる。特に絶壁があるわけでもないようだし」

ふたりは高千穂河原に向けて歩き出した。登山と言うより散策といった感じだ。

「美しい景色と、おいしい空気」

祐子は呟いた。暫く石畳の道が続いた。参道のような石畳の道の先にある石段を登ると大きな鳥居が立っていた。鳥居を潜ると石畳の広場になって

いる。広く、何も無い空間が妙に空虚さを感じさせる。その鳥居に続く参道の先の石垣の上に祭壇がある。祠も神殿も無い神社だ。立て札に霧島神宮上宮跡と書いてあった。磐座の上に飾られた幣が厳かさを感じさせる。祐子が

「ここは昔の霧島神宮の跡なのよ。御鉢の爆発で焼けちゃったんで、下にある今の神宮の場所に移したそうよ」

そう言って、ハンドバッグから100円玉を取り出して賽銭箱に投げ入れると、2礼2拍手1礼の拝礼をした。賢は祐子に続いて2礼8拍手1礼で拝礼した。

「あなた、そんなに拍手するの？」

「うん。天界に繋がる神社の旧社なのだろう。最高の礼儀を尽くそうと思ってさ」

そこが高千穂峰登山の起点になっているようでもある。そこから道は右へ直角に折れる。アカマツの林の中を登ると正面から遊歩道が合流し、高千穂峰へは左の道を行くようだ。祐子はしきりに地図を見ては方向を確認した。賢が覗き込むと、

「左で大丈夫よ。スマホがあればGPSで方向が分かるのにね」

と言った。標識が左手にあった。暫くは石畳の道が続いき、遠くに霧島連山が見える。車の中で目前に展開されていた、自然が造り出した輝くような緑の装飾は、この辺りには見当たらない。どちらかというアカマツやカシなどの木肌の表れた森林が続き、岩の目立つ山道だった。途中から石畳が途切れ、赤くガレた道を進むとやがて視界が開けた。前方にごつごつした広い斜面が広がる。そこで一休みしてから再び歩き始めた。ふたりはひたすら頂上目指して登って行った。次第に木々が消えて赤茶けた溶岩の道に変わり、同時に急勾配の本格的な登山道へと変わってゆく。

「歩きにくいだろう。俺に捕まれよ」

祐子は賢の腰のベルトを掴んだ。祐子はここにこしていて、少しも歩きにくそうに見えなかった。しかし、ここからは勾配が急になり、山道も霧島の噴火時の溶岩の上に作られている。ごつごつした小石が多く、気を抜くことはできなかった。賢は危ないところは自分が先に歩き、確かめてから

祐子の手を引いて引き上げるようにして進んだ。やっとのことで、この急勾配のガレ道を登り切ると、御鉢の火口壁に辿り着いて急に視界が開けた。賢が御鉢の中を覗くと、碗状の窪の中心付近から僅かな煙が上がっている。以前アリゾナで見たメテオクレーターによく似た火口だ。賢は「まだ活動しているぞ」と思った。辺りに広がる溶岩が形作る奇形は、ここが嘗て噴煙を撒き散らした山頂であることを物語っていた。中岳が間近に感じられ、その向こうに山々が連なっている。噴火の記憶の新しい新燃岳も見える。霧島連峰の中にいることを肌で感じた。青み掛かった山々の影の向こうに錦江湾が広がり、近くで見ると雄々しかった桜島が美しい優雅な姿に浮かび上がっている。何処に行ってしまったのか、登山口で見た山行グループの姿は見当たらない。ふたりは風に煽られて滑り落ちないように細心の注意を払いながら小幅に足を進めた。賢が漸く大きめの岩を見つけ、ふたり並んで腰を掛けた。祐子は賢に身体を擦り寄せて座った。

「天城の時と同じようね」

「うん」

「ねえ、ここ、坂本龍馬がおりようと新婚旅行に来た所なのよ」

「へえ、そうか、龍馬は女好きだったからな」

「あなたと同じよ。やさしかったのよ」

祐子は小声で言った。

「寺田屋騒動の後かな？」

「寺田屋で切られた傷を霧島温泉に浸かって治したようね」

ふたりは少し休んでから再び登り始めた。御鉢から一度平らなコルに下りる。暫くの間平坦な溶岩道を行くと、その先は丸太を埋め込んで階段にした急な登りとなった。丸太の階段は祐子には堪えた。20段ほど登ると、直ぐに息が切れてきた。賢は祐子を先に行かせて自分は後から登った。丸太階段は傾斜もきつく距離も長い。足場は小石の砂利で滑り易く、岩と石ころばかりで登り難い。足を踏ん張らなければならないので、途中で何度も休んだ。足を踏み外せば一気に下まで滑り落ちる危険性があった。細心の注意を働かせていたが、やはり祐子は滑った。その瞬間、賢は祐子が倒れるのを防ごうと左手で祐子の足を押さえようとした。しかし間に合わず、

祐子は滑って賢の足下に足からぶつかって来た。賢は思わず前傾で丸太と平行になって両手を着いた。祐子が賢の身体の下にクロスする形で潜り込んで来た。賢は必死に丸太を握り、祐子の身体の上に自分の身体を重ねて、滑るのを止めた。

「ごめんなさい」

「大丈夫か？」

賢は祐子の手を取って身体を起こしてやった。

「怪我は無いか？」

「滑っちゃった」

祐子はぺろっと舌を出した。

「大丈夫か？どこか打たなかったか？」

「大丈夫よ。あなたが支えてくれたもの」

日差しが厳しい。賢は祐子のことが気掛かりだった。木立が無くなる前に、木陰で身体を冷やしておくんだと思った。しかし、祐子は転んでからというもの、息こそ乱れていたが喜びに満ちていて、苦しくなると、「ストップ」と言っただけで止まりその場にしゃがみ込んだ。その度に賢はビニール袋からペットボトルを取り出して祐子に渡したが、祐子はそれをほんの少し口に含むだけだった。

「ここを乗り切れれば高千穂峰山頂に到着するはずだ」

賢がそう言うのはもう5回目である。今日は祐子が「おんぶして」とは言わなかった。流石に急な上り坂で無理を言うてはいけないと思っているようだった。途中から丸太も無くなって、まるで富士山の8合目あたりを登っているように、礫岩と溶岩の入り交じったガレの山肌を登ることになった。祐子は何度も足が滑ってずるずると下に滑り落ちそうになる。賢はその都度足を踏んばって祐子を支えた。漸く頂上に日の丸の旗がひらめくのが見えてきた。やっとの思いでそこまで登り切ると、一気に視野が開けた。頂上には既に10人以上の登山家が出て、思い思いに休憩していた。周りを見回すと全方位のパノラマが望めた。

「あーあ、素敵ね」

祐子の両膝と臀部には滑ったときに作ったすり跡が見える。賢は腰掛けら

れそうな大き目の岩を探し、祐子の手を引いてそこまで導いた。祐子の掌は砂利の食い込んだ跡と白っぽい粉で汚れていた。賢は祐子のパンツの裾を膝の上までたくし上げ、怪我が無いか確認した。

「どこかぶったところはないか？痛いところは？」

「無いわ」

膝には傷は無かったが、右足の脛に青い黒ずみが出来ていた。

「ここ痛くないか？」

「押さえると少し痛いけど、平気よ」

「結構きつかったな。600メートルも登ったんだぞ」

「でもね、とっても楽しかったわ」

登り始めて2時間10分が経っていた。

「まだ、お昼には早いわね。えーと、11時10分過ぎ」

祐子は携帯を取り出して時刻を確認した。高千穂峰は登り口から見ただけでも荘厳な印象を与えたが。山頂部は突峰となっていて付近には火口跡がいくつかあり、まるで月面のクレーターを思わせる光景である。この風景を見ると別世界に来たようで、天孫降臨も分かるような気がする。山頂まで登り切ると、その標高にも拘わらずこの峰が天空に突き抜けているような錯覚を覚える。山頂の奥に鉄柵に囲まれた石積みがあり、その中央に逆鉾が突き刺さっていた。ふたりは逆鉾の前に設けられた鳥居の近くに寄って天の逆鉾を凝視した。そんなに古くは感じないが、登山家の会話から逆鉾はかなり昔からそこに刺さっているのだということが分かった。

「瓊々杵尊が天孫降臨したときに使った鉾を目印に立てたと言われているらしいわ」

「よく調べてあるな」

「本当はね、チェックアウトの時フロントにあったパンフレットを読んだのよ」

暫く景色を眺めてから、ふたりは早目に昼食を摂ることにした。祐子は「梅干しと鮭のお握りでも、山頂で食べると部屋の中で食べる懐石料理よりずっと美味だ」などと思って微笑んだ。

「あの桜島の近くだったわね。ここから見ると、嘘のようね」

「本当だな。あの場所で失踪したという事実が滑稽にさえ思えるね」

「時空の歪みなんて無いのかも知れないわね」

「うん、俺も今そう思った」

「わたしたちも龍馬達と同じね。新婚旅行よ」

「天城で一回済んでいるよ」

「あれは、婚前旅行よ。これは新婚旅行。ふたりだけしか知らない旅よ。秘密よ。きっと、わたしおりょうと同じ気分よ。あの逆鋒が天狗のお面に似ているなんては思わないけどね」

ふたりは祐子の持っているデジカメで写真を撮った。休憩中の中年女性に頼んでシャッターを切ってもらった。中年女性はデジカメを渡されて、少し躊躇したが、操作が簡単と分かると快く引き受けてくれた。祐子は賢の左手を抱えるようにして賢に身体を寄せた。

「背景に桜島が入るようにして頂けますか？」

「はいはい、ではいいですか？・・・はいチーズ」

賢は祐子の腕を抱える手に力を込めた。中年女性に礼を言うと、祐子は早速写真を確認した。祐子が力を入れたとき、賢がすこし祐子の方に顔を向けた状態で映っていたが、それはそれで賢が自分を気遣っているようで小気味よく感じた。下山道は登りより更に歩き難かった。滑り易さはあまりなかったが、ガレの凸凹が一層酷く感じられた。ふたりは転倒しないように意識全開の注意を払って下山した。下山は登山より歩き難い分だけ景色を堪能できた。展望が開けていて気持ち良かった。駐車場に戻ったのは午後2時少し前だった。衣服に付いた汚れを払ってふたりは車に乗った。

「結構くたびれたわ」

「祐子、よく登れたな。登山の支度もしてないのに」

「これ、内緒よ。霧島神宮をお参りしたってことにしておこうね」

「それは構わないよ。だけど、隠すこともないじゃないか」

「秘密、秘密よ。ふたりだけの」

祐子は右手の人差し指を自分の唇に斜めに当てて小声で言った。

「これからね、秘密じゃない霧島神社の参拝をしましょ」

「直ぐ近くだよ。10キロも無いぜ」

霧島神社の前に車を止めると、ふたりは車から降りた。賢は「少し待って」と言っで自分が先に降り、助手席に廻って祐子の手を取ってエスコートした。祐子は降りる時に膝ががくつとしたが、賢の腕を頼ってほつとした。しかし足首が痛かった。足を引き摺るようにして歩き出すと、賢がドアをロックしてから直ぐに駆け寄って祐子の手を引いた。

「足が痛そうだな」

「少し。でも大丈夫」

駐車場は参道の脇にあった。「第2の鳥居」といわれる2番目の鳥居から潜った。初め足を引き摺っていた祐子も、少し歩き始めると元気が出てきた。途中に龍馬とおりょうの立像があった。何を思ったのか祐子はその立像に対して2礼2拍手1礼の拝礼をした。賢が拝礼の理由を聞くとただ「ふふふ」と笑っただけだった。そこを右に折れると正面に石段がある。その向こうに第3の鳥居がありその奥に朱塗りの拝殿と本殿が鎮座していた。第3の鳥居からは参道が石畳になっていて歩き易かったが、山から降りたばかりのふたりの膝には堪えた。御神木の巨大な杉がふたりを迎えているようだった。

「神社に来ると落ち着くわね」

「そう、独特の霊域を作っているようだな」

「そこの細石は何のためにあるのかしら」

歩きながら、祐子は右側に置かれている細石を指差した。

「何のためだろうな。おそらく演繹から帰納に立ち返り、全ての人々が元の一体に還り、それが固定化することを象徴しているんじゃないかな。日本のこころさ。伊弉諾尊、伊弉冉尊の時に分離が起きたんだな。それから部分最適になって、みんなが自分だけの特徴を持って輝くことを目指し始めたんだ。今もほとんどの人が生の目的を誤解しているな。神社は細石を置いてそれを戒め、論しているように思えるな」

「ふうーん。細石って小石のことでしょ」

「小石が石灰岩の溶液で繋がり合っただよりに固まって、岩になることがあるだろう。固まった巖も細石と呼ばれるんだよ」

「こういうことはやっぱりあなたが一番良く分かるわね」

そう言うと祐子は賢と繋いでいた手を抱え込んだ。

「でもね、岩ってだんだん砕けていって小石になってゆくんじゃないの」
「普通はそうだな。それがこの世界の循環の一方の方向さ。小石になると、いずれ砕けて砂になり、更に細かくなって土になり、土は生物を養い、生物の死骸を包含して地中や海底に沈み、堆積して固まり、長い年月を掛けて岩になる。循環のもう一方の方向さ。俺たちは岩を砕くことばかり考えて、綺麗な宝石を見つけたりして「美しい」と喜んでいるけど、土が巖になることを忘れてるんだな。そこも大切なんだ。そのプロセスが無いと宇宙は出来ない」

「ふうーん。やっぱりあなたの洞察力は凄いわ」

祐子が抱え込んでいた賢の手を自分の両手で握った。

「祐子、今度は春に来ような。ここは桜の木が多いから、満開の時はさぞ美しいことだろうな」

「あなた、春の高千穂峰はミヤマキリシマが美しいことで有名よ。その頃、又来たいわ」

話ながら歩いたので、ふたりは足の痛みを忘れていた。拝殿に着くと祐子は100円玉を、賢は祐子から10円玉をもらって賽銭箱に放り込んで、調子を合わせて2礼2拍手1礼の祈りを捧げた。

「この神社の祭神は火瓊瓊杵尊で、一緒に祀られている神様が木花咲耶姫尊、彦火火出見尊、豊玉姫尊、鵜葺草葺不合尊、玉依姫尊、神倭磐余彦尊だそうよ。よく覚えたでしょう」

「うん、凄い。皆、古事記に出て来る神様だな」

「ここにも木花咲耶姫尊が祀られているのね」

「木花咲耶姫尊は日本中、到る処に祀られているんだな。大体神社は人間が作ったものだから、木花咲耶姫尊がもっとも敬愛されている神の1柱ということなんだろうな」

帰りの飛行機は空いていた。賢と祐子は隣り合った席を確保できた。飛行機が離陸するとふたりは直ぐに寝入ってしまった。スチュワーデスに起こされた時、ほかの乗客は既に離席して降り始めていた。ふたりは急いで荷物をまとめて飛行機から降りた。バゲッジクレームから荷物を取って出

て来ると藤代登紀子と亜希子が出迎えてくれた。

「お帰りなさい」

亜希子が呼び掛けた。祐子は

「只今帰りました」

と言った。賢は頭を下げてから、登紀子の方を見て

「夜分お出迎えいただきありがとうございます」

と言い、

「亜希子さん、身体は回復しましたか？」

と亜希子に向かって言った。

「わたくし、何ともありませんでしたのよ」

両親と一緒に戻ったことへの不満を籠めたような言い方で亜希子が応えた。

その時、四方からフラッシュの光が降り注いだ。

「記者だ」

賢と祐子は急いで登紀子達の後を追った。記者たちはどうやら登紀子達の後を付けて来たようだ。乗車エリアで運転手がサクセスを停めて待っていた。運転手は急いでトランクに賢達の荷物を入れ、後部座席のドアを開けた。初めに祐子、続いて登紀子が乗り最後に亜希子が乗り込んだ。亜希子が姿勢を糺すと、運転手は静かにドアを閉め、賢の為に助手席のドアを開けた。賢が乗り込むと登紀子が言った。

「記者につけられていたのね。でも、これで一安心。少し狭いけれど暫く辛抱してね」

「申し訳ありません。わたくしまで乗せていただいて」

賢が応えた。

「内観さん、今夜はわたくしどもの所にお泊まりください」

「いえ、わたくしはホテルに宿泊致しますので、恐縮ですがどこか大きな駅の前で降ろしていただけないでしょうか？」

「ご遠慮なさらないでください。今夜は藤代肇もあなたの方のことをお待ちしておりますよ。お食事を一緒にいただきながらあなたのお話を伺いたいと言って、とても楽しみにしておりますの」

賢は登紀子の言葉に甘んじることにした。藤代肇の家に着いて車が停まる

と、門の外に待ちかまえていた10人あまりのカメラマンが一斉にフラッシュを焚いた。

「内観さん、無事ご帰還された感想をお願いします」

「どうやって帰還したのですか？」

記者の声が窓越しに聞こえて来る。門の自動扉が開いて車の中に入ると、皆ほっとした。車から降りた4人を家政婦が出迎えて全員を応接室に導いた。運転手が後からふたりの荷物を運んで来た。応接室は30畳程もあり重厚な感じのする飾り棚が置かれていて、その上にロダンの彫刻のレプリカと思われる50センチ大のブロンズ像が置かれている。照明は2カ所にあって、直径5センチほどの電球が無数に付いた金剛色のパネルが天井に張り付けられている。部屋全体が落ち着いた明るさで照明されていた。ソファは3人掛けのものが2客、一人掛けが4客あり、中央の大理石のテーブルを挟んで長手の両サイドに3人掛けのソファ、奥と手前の端に一人掛けのソファが2脚ずつ置いてあり、奥の左の一人掛けのソファにカジュアルな服装の藤代肇が腰掛けていた。藤代は微笑みながら言った。

「祐子お帰り、内観さん、ようこそいらっしゃいました。さあどうぞ」

「お父様、ただいま帰りました」

「こんばんは、夜分失礼させていただき大変恐縮です」

「堅苦しいことは言わず、まあ、お掛けください」

賢が長椅子に腰掛けると、全員が腰を降ろした。

「いろいろあったから疲れたでしょう。部屋を用意してありますから、今日はゆっくり休んでください。祐子も疲れただろう。よく頑張ったな」
祐子がこの部屋に入るのは2度目だった。部屋全体が重々しくてあまり居心地が良くない。

「いいえ、お父様。わたくしは亜希子さんや賢さんが戻られたので、疲れはどこかに飛んで行ってしまいました」

「はっはっはっは、お前のバイタリティには感心するよ。・・・先ずシャワーでも浴びて、少しリフレッシュして、それから食事にしよう」

「はい、お父様」

登紀子は家政婦を呼んだ。家政婦は入り口のドアの近くに立っていたが、

直ぐに登紀子に近付いた。

「内観さんをお客様の部屋にお通ししてくださいな」

「はい、奥様」

祐子は亜希子と共に自分の部屋に向かった。亜希子が祐子の荷物を持つと言い、それを引いて歩いた。ふたりは顔を見合わせて微笑んでいたが。亜希子が祐子に

「お姉様、どこかで転んだの？」

と聞いている。祐子は

「ええ、少し滑っちゃったのよ」

と曖昧な応えをしていた。賢は自分の荷物を持つと家政婦の案内に従って吹き抜けの階段を昇り、直ぐ左側の客室に入った。広い部屋である。部屋は祐子の部屋の隣に位置し、東向きでベッドと2人掛けソファが置いてあり、壁際に小机が置かれていた。賢は自分の住んでいたアパートの部屋と同じくらいの広さの部屋だと思った。壁にシャガールの「サーカス」のリトグラフが掛かっていた。賢はシャガールの絵が好きだったので、直ぐに目に付いた。部屋には大きな窓があって、木々の暗い影の間をビルの灯りが潜り抜けて煌めいている。家政婦は

「30分ほどしてから、ダイニングルームにお越しいただけますか。ダイニングルームは先ほどの応接間の反対側でございます」

と言った。賢が礼を言うと家政婦は頭を下げて出て行った。賢は突然自分がホテルの1室にいるような錯覚に捕らわれた。部屋は内装が新しく隅々まで清掃されていて、あまり使われていないのではないかとさえ思えた。賢はシャワーを浴びると登紀子に買ってもらったシャツとズボンに着替えた。祐子が返してよこした3冊のノートをトラベルバッグから引っ張り出して「失踪事件調査ノート」を開いた。ページを捲ると自分の書いた説明書きが顕れた。賢は次々にページを繰っていった。10番目の失踪事件のページの次に新たにページが設けられていて、祐子の字で「第11のケース「賢と亜希子の鹿児島での失踪」と書いてある。そしてその考察に「生還可能」と力強く書き付けられていた。これを書いた時に祐子は自分と亜希子を生還させることを心に誓ったのだと思った。賢は祐子に感謝した。

そこには既に祐子が概要などの説明を書き込んである。賢は実際に発生した事件として空いている項目を埋めていった。今は全ての項目を正確に埋めることができた。書き終わって時計を見ると25分経って7時45分になっている。賢は階段を降りてダイニングルームに行った。広い部屋の中央に置かれたダイニングテーブルのピンク色のテーブルクロスが目飛び込んできた。既に全員が7メートルほどもある長円形の食卓に着いていた。天井には7つの照明に分かれた木製の大きなシャンデリアが輝いていた。シャンデリアの中央は龍の浮き彫りが施されたダークブラウンの飾りになっている。全体に落ち着いた雰囲気を感じさせた。各人の席は1メートルほどの間隔で並べられていた。テーブルには既にナイフとフォーク、スプーンが並べられていて、右手側に臘脂のナプキンがナプキンリングに通して置かれている。5人の席は奥の方の端に寄せて設けられていた。端席に藤代肇が着いていた。食卓の二つの籠には切ったフランスパンが用意されていて、その脇に小皿に盛られたバターが置かれている。賢の席は藤代肇の隣に用意されていた。賢は藤代肇の言葉に従って席に着いた。

「さあ、今日は全員揃ったし、その上内観さんもお見えになったから改めて乾杯しよう」

メイドが赤ワインの栓を開けて藤代に渡した。藤代はコルクのフレーバーを確かめて試飲してから、メイドに「皆様にお注ぎするように」と言った。メイドは先ず賢のグラスに注ぎ、そして藤代肇、藤代登紀子、祐子、最後に亜希子の順に注いでいった。わざわざ席を廻って順番を決めて注いでいる姿が、賢に形式を重視する家庭という印象を強く与えた。しかしそれが自然で変に堅苦しくないのも不思議な感覚だった。メイドが大皿にペーストやハム、チーズを盛った前菜をテーブルの2カ所に置いた。その前菜を先ほどの順に取り皿に盛り付けて行く。

「我々が帰った後で何か収穫はありましたか？」

「はい、あの土地の特異性から来る何かを掴みたいとも思いましたが、それは確認できませんでした。原智明研究会に行ってみました。そこで、原智明という方がどういう方だったのか知りました。あの方の思考能力が人並み外れていたことと、それに加え人間性が豊かだったということが分か

りました。その後、友人の樋口が鹿児島にある契約会社との会議で出張して来ましたので、一泊延長して樋口の相談ごとを聞いて、翌日霧島神宮に参拝してから戻りました」

「そうですか。それで身体はもう大丈夫なのですか？」

「はい、元に戻るのに半日程掛かりましたが、今はもう安定しています」

「いろいろお話を伺いたいわ。さっき言っていた原智明さんの人間性がいいというのはどういうことかしら？」

登紀子が言った。

「原智明さんが人と接する時は、いつも相手の立場でものを見ていたというような感じです」

「そうなんです」

祐子が会話に加わった。

「わたくし、友達からいろいろな話を聞きました」

祐子は自転車事故を未然に防いだ時の話を説明した。

「この世界にはそんな人もいるんだな。どんな青年だったんだろう」

「小柄で子供のような感じの目の大きな方ですわ、お父様」

賢が後を継いで説明した。

「赤ん坊の時にご両親を亡くされて、孤児の施設で育った方なのです。その方の人間性も素晴らしいのですが、彼がものを見る見方が我々の常識を越えていて、先端科学が発見しつつある常識を覆すような特異な事項を既に見抜いていたようなのです」

「うむ。・・・よろしかったら前菜を召し上がってください」

「はい、ありがとうございます」

賢がフォークを手にもせず夢中になっている話の流れに藤代肇が間隙を作った。他の4人は前菜とワインを味わいながら賢の話の話を聞いている。自分の知っている話なので、祐子の耳には賢の話し声が心地よく響く。亜希子は初めて聞く話もあり、藤代肇の方に顔を向けて話している賢の横顔をじっと見つめている。登紀子は藤代肇と賢の会話の中身より、皆が会話していることを楽しげに見ている。

「どうして、失踪のような現象が起きるかということが、直接ではありま

せんが、原智明さんの語録の中にも一般的な表現で書かれています。
藤代さんは、人間のゲノムにはスイッチのような機能が組み込まれていて、そのスイッチをON/OFFすることで、人間の特定の能力が働くようになったり停止したりすることをご存じですか？」

「うむ。以前、バイオ関連の事業を展開している会社の専務がそんなことを言っていたな。人間の能力は本当はもっと凄いつて言っていた」

「DNAが光子を動かすということは聞いたことがございますか？」

「それは知らないな」

その時メイドがサラダとポタージュスープを運んで来た。そしてそれを順に給仕してゆく。賢の正面に登紀子、その隣に祐子が座っている。亜希子は賢の右隣の席に着いている。賢は話しながら祐子の顔は伺えたが、亜希子の方に視線を向けていない自分に気付いた。先ほどから痛いほど亜希子の視線を感じていた。

「どうやら、原智明さんのゲノムの中のあるスイッチが他の人と違って、ONになっている部分が沢山あるんじゃないかと思うようになったんです。そして、その内の幾つかのスイッチの状態が、亜希子さんや僕のスイッチの状態と同じなのではないかと考えています」

賢は同意を求めるように亜希子の方を振り向いた。亜希子は頷いた。

「そうです、お父様、わたくしもそんな気がしますわ。わたくしは勿論原智明さんのような天才的な能力の方のスイッチはOFFで、突然消える方のスイッチだけONの状態だと思いますけど」

皆一斉に笑った。

「うむ。・・・消える力が人間の中に埋め込まれているのか？」

「それが先ほど申し上げた光子を動かす力に相当すると原智明さんは見ていたようなのです」

登紀子が聞いた

「その光子って何ですか？」

「はい、光の元のようなものと考えていただければよろしいと思います」

「光の元なのね。味の素のような？」

皆笑った。

「ええと、それで光が出来ているようなものです」

「ふうん。光もそんなもので出来ているのね。・・・スープをいただきますしょう」

皆暫くスープに神経を集中した。賢がそつと祐子に目を移すと、祐子が自分を見て微笑んだように思えた。

「この間も申し上げたと思いますが、消えるという特殊な能力を持った人が自分の意志で消えたり出現したりする為には、何か別の力を作用させる必要があるようなのです」

「つまりは何かの力が作用すると、消えたり顕れたりするということなんだね」

「簡単に言うとそういうことだと思います。そして、この世界から消えている時、消えている人の時間と空間も同時に消えていると思えるのです。この世界に住んでいるわたくし達には、信じられないことなのですが、亜希子さんとわたしが戻って来た時、腕時計が失踪した時の時刻を指していたのです。でも、不思議なことに、その間ずっと意識があったように感じます。思考はありませんでしたが」

「うむ。難しくなってきたな。もう一度聞いてもやはり、一寸簡単には理解できないな。この話は又詳しく教えてくださいませんか？」

「はい、わたくしもまだまだ勉強中ですが分かることは何でも説明させていただきます」

メイドがメインディッシュを持って来た。シャリアピンステーキだった。やはり最初に賢の前に皿が置かれた。亜希子がサラダボールから取り皿にサラダを取って賢の側に置いた。

「内観さん、野菜もどうぞ」

「ありがとうございます」

「亜希子さん、良かったわね。内観さんが戻って来るのを、首を長くして待っていたのでしょ」

「お母様ったら」

亜希子は登紀子の方を見て少し睨むような目付きをした。祐子の心が少し波立った。全員のステーキが用意できると、藤代肇は

「さあ、熱い内にどうぞ」

と言って促した。暫くは全員食事に集中した。

「このワインはシャリアピアノに良く合うな」

「はい、そう思います」

祐子が応じた。賢と亜希子が直ぐにワイングラスを手にした。

「ところで、樋口さんはどんな相談を持ち掛けたのですか？よろしかったら聞かせてもらえますか？」

「はい。最近政府主導のプロジェクトが進んでいるとのことですが、そのプロジェクトに樋口の会社も入札しようとしているようなのです」

「そう、まだ公開されていないが国家の存亡を賭けた大プロジェクトが立ち上がりようとしているんです。ご存じの通りそれは凄惨な事業なんですよ」

「はい、樋口の会社も入札企業に入れて欲しいようなのですが、ある程度の組織化が出来ないと無理なので、組織化の時に藤代さんの会社の協力が得られないか伺って欲しいと言っておりました。わたくしにはよく分かりませんが」

賢は頼まれたことはここまでだと思い、話してしまって少しほっとした。

「うむ。樋口さんとはあなたと亜希子を探しに鹿児島に行ったときにお会いして、会社のことなどを聞いています。革新的な技術を武器に成長している企業のようなですね。うちは総合企業だからいろいろなリソースがあって簡単に入札条件をクリアできたけれど、樋口さんの会社だけでは少し難しいかも知れませんね。入札条件の中に資本規模、財務状況、組織力、技術力、社会貢献度、そのほか全部で20項目ばかりの項目があって、最低線をクリアしていないと登録もできないんです。樋口さんの企業は確か資本金1億円程度だったと思いますが、単独ではどの事業の入札も厳しいでしょう。うちはインフラプロジェクトに参加しようと思っているんです。樋口さんの会社だと、システムプロジェクトの一部だな」

「はい、そう言っておりました」

「分かりました。その件は、うちの総合企画部に話しておきましょう。1週間後に何らかの回答をしますと、樋口さんに伝えてください」

藤代肇は樋口の会社のことは良いとも悪いとも何とも評価しなかった。ビ

ジネスライクだなと賢は思った。

「ありがとうございました。よろしくお願ひ致します」

祐子は会話に口を挟まない方がいいと思って黙っていた。メイドがテーブルの上を片付けた。少しして、デザートにメロンとアイスクリームの入ったカップを運んで来た。

「祐子さん、霧島神宮に行ったのね」

「はい、お母さま」

「わたくしたちは一度も行ったことがないのよ。官幣大社ですわね」

「はい、静かな参道と朱塗りの立派な拝殿がありました。御祭神は火瓊々杵尊だそうです」

「あそこは天孫降臨の地と言われているのでしょうか？」

「はい、霧島の高千穂と宮崎県の高千穂の両方が天孫降臨の地として祀られているようです」

「両方っていうのも変わっているわね」

「はい、何でも本居宣長が両方がそうだとおっしゃったようです」

「西洋人じゃとても理解できないだろうな。「神様が初めて降りた土地が2カ所にあるなんて矛盾している」なんて言うだろう」

「何か特別の神様が祀られているのかしら」

「神様ではないのですが、参道の途中に坂本龍馬とおりの像がありました。寺田屋事件で傷を受けて、その湯治の目的で霧島の温泉に行っていたようです」

「そうなの。そんな話を聞いたことがあるわ。亜希子は知っていたかしら」

「いいえお母様、わたくし知りませんでしたわ」

暫くの間談笑の時間を過ごしてから全員隣室の居間に移った。居間は5年前に新しく作った部屋で、以前は7部屋あった客間の一つを改造したものだと亜希子が祐子に言った。居間には3人掛けのソファー2脚がコーナー椅子で繋がれていて、真ん中にガラスのセンターテーブルがあった。壁には90インチの壁掛けの液晶スクリーンがあり、そこにアンコールワットの映像がゆっくり流れていた。祐子が

「アンコールワットね」

と言うと、亜希子が言った。

「普段は世界遺産の映像を映しているのよ。この画面はテレビにも、ビデオにも、パソコンの画面にも切り替わるの。お父様はこの画面でテレビ会議に参加されることもあるのよ。ほら、画面の上にカメラとマイクがあるでしょう。分かるかしら？」

居間にはソファのほかに片隅に仕切壁があり、その陰に6人ほどが掛けられるテーブルが設けられている。藤代肇が居ないときなどは、登紀子と亜希子がふたりで食事を摂ることもあるとのことだった。藤代肇と登紀子がソファの奥に腰掛けていて3人を手招きした。亜希子と祐子が両親の近くに座り、賢は少し離れて座った。藤代が賢に向かって言った。

「内観さん、実はあなたのアパートにあったものは全て家で預かっているのですよ。勝手でしたがあなたのアパートの契約については祐子にも聞いて破棄させてもらいました」

「ありがとうございました。丁度契約期限が来ていて、継続を取り止めようと考えていた時でしたから本当に助かりました。いろいろお手数をお掛けして申し訳なく思います」

「いやいや、それはよろしいんですが、わたくしどもの一存であなたのアパートの契約を解除してしまいましたので、大変申し訳なく思っています。一つ提案ですが、亜希子が一時住んだアパートをご存じだと思いますが、亜希子もあそこを引き払ってこの家に戻りましたので今は空き家になっています。あそこは購入しておりますので、よろしければそちらにお住まいになられては如何かと。勿論家賃は不要です」

亜希子がにっこり笑ったのが、賢には分かった。

「ありがとうございます。でも、わたくしには寝る場所があればそれで十分ですのであのような立派なマンションは勿体ないと・・・」

「しかし、あそこは空き家になっていますからどなたかに住んで頂いた方がいいのですよ」

「ありがとうございます。それではお言葉に甘えて住まわせていただきたいく思います。でも、家賃は支払わせてください」

「そうですか。それでは、こちらが強引にお願いしているわけですからこ

れまでの家賃の半分ということに致しましょう。それで如何ですか？」

「本当にそれでよろしいのでしょうか？」

「はい、結構です」

「ありがとうございます。今日は手元に現金がございませんのでお支払いできませんが、明日お持ち致します。それに荷物の処理に掛かった費用を教えていただけないでしょうか？」

「それは不要です。わたくしどもで行いましたから。それに家賃もいつでもいいですよ。あなたの荷物は早速明日運んでおきます。電話は以前お使いの電話をそのまま使えるようにさせます」

「何から何までお心遣いいただいて恐縮致します。本当にありがとうございました」

翌日、賢が目を覚ますと既に藤代肇は家を出た後だった。いつも朝6時前には家を出るとのことだった。賢は3人の女性と一緒に朝食を摂ると、早速新しいマンションに行くべく登紀子に暇（いとま）乞いをした。祐子と亜希子も賢に附いて行くことにした。自分の不在の時に引き払われたアパートに特に未練は感じなかったが、地下鉄を降りると自然に以前住んでいたアパートの方向に意識が向いているのを感じた。いつもの路地からアパートを左手に見ながら右手にある新しいマンションに入って行くのに多少違和感を禁じ得なかったが、それも一時的感覚だった。マンションの部屋は亜希子が住み始めたばかりだったのだが、亜希子の両親は亜希子が失踪すると直ぐに亜希子の荷物を自宅に移してしまい、もし亜希子が戻った時は否応無しに自宅に戻すつもりだった。最愛の娘が失踪したという絶望から亜希子を思い起こさせるものは全て手元に戻そうとしたのである。自分が不在の間に両親が行った処置に対して、亜希子は感謝こそすれ反発は感じなかった。既に祐子が自分の部屋の隣に住していることで、生まれてからずっと心の奥底に巣食っていた、兄弟や友人のいない寂しさからくる孤独感が一気に解消され、失踪から戻れた興奮と相まっていくらか弾んだ心になっていた。祐子もこれまで住んでいたアパートの方向に自然に足が向くような感覚を覚えたが、賢のアパートに向かう路地に入ると意識が以前の賢のアパートに引き付けられていることに気付いた。祐子には賢の今度

のマンションは亜希子のイメージが被り、何となくしっくりこなかった。しかし、それも一時の感覚だと分かった。賢は亜希子がこのマンションに越して来たばかりの頃ここを訪れている。しかし、まるで初めてのよう話す亜希子の説明にいちいち頷いた。部屋に入ると、冷たい感じのするがらんとした空間だった。以前ここを訪れた時より一段と広く感じる。賢は朝亜希子の家を出る前に荷物の配送の段取りを付けてきていた。藤代家と運転手との間の契約には車についての条件があり、藤代肇はいつでも必要な時に必要な車を使用できるという契約をしていることが分かった。その会社の手配したトラックで9時には賢の荷物が搬送されることになっていた。亜希子は自分の携帯にトラックの着荷時の連絡をするように運転手に伝えた。